

[資 料 1]

2021年度事業報告書

公益財団法人 東洋文庫

2021年度 公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人 東 洋 文 庫
理事長 畔 柳 信 雄

2021年4月1日～2022年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業の概要は下記の通りです。

事 業 目 的

公益財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行うとともに、東洋学の不特定多数への広い普及をはかり、学術・文化・芸術の振興に寄与する。

事 業 項 目

概 要.....	2
I アジア基礎資料研究.....	10
II 資料収集・整理.....	33
III 資料研究成果発信.....	36
IV 普及活動	37
V 学術情報提供.....	42

概 要

研究事業の全体構想

東洋文庫は、欧文貴重書 1,100 点余を含む欧文図書資料からなるモリソン (G. E. Morrison) コレクション、ならびに和漢の貴重古典籍からなる岩崎文庫を中核として、1924 年、岩崎久彌氏によって、アジアの貴重図書資料に関する民間の研究図書館として創設された。その後 100 年近くにわたり、一貫してこれらの貴重図書資料を中核とする 100 万冊に及ぶアジア諸地域の現地語資料を継続的・系統的に収集し、それらのすべてを散逸させることなく保存・管理し、同時に広く世界の研究者ならびに市民に公開することを目的とした事業を進めてきた。

研究事業の長期的な目的は、これらのアジア研究に関する貴重図書資料を保存・管理・公開し、なおかつアジア現地語資料を収集・整理して、内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することに置かれている。このような研究事業を 283 名に及ぶ研究員（うち専任 105 名、兼任 25 名、客員 153 名）を擁して推進する類似の民間の研究図書館は国内には存在せず、世界的に見ても稀有な存在であり、アジア研究の長い伝統を有する東洋文庫が世界的に高く評価される理由であると同時に、長年にわたって蓄積されてきた特色ある研究を継続的に推進することは、世界のアジア研究者が切望するところでもある。

2021-2023 年度の特定期間費による研究事業の目的

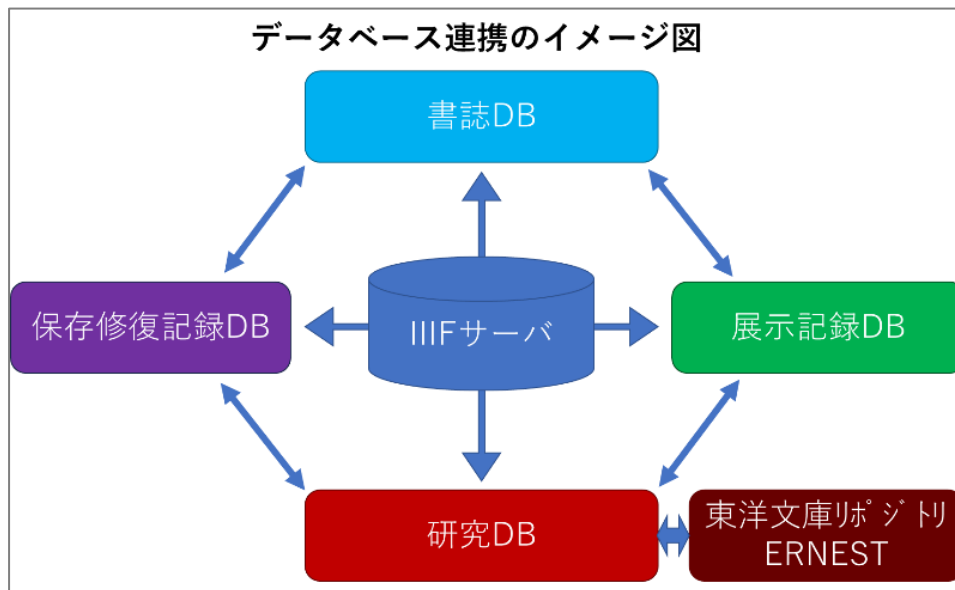
東洋文庫の基本的な事業を継続的に推進するなかで、2021-2023 年度において重点的に取り組む主要な事業項目は下記のとおりである。

- (1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開
- (2) 総合的アジア研究データベースの推進（発展期）
- (3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進
- (4) 研究成果の刊行・発信の強化
- (5) 若手研究者の育成

これらの研究事業は、個人や複数の研究者が競争的資金等を活用して行うような短期集中的な研究ではなく、東洋文庫所蔵の貴重アジア資料を対象とした日常的・継続的な基礎資料研究の伝統に根ざすものである。

東洋文庫の蔵書は広くアジア全域に及び、その維持・継承と研究成果の発信に対する国内外の研究者・関連学界の期待は大きい。そこで東洋文庫では、蔵書の保存・管理・修復、および関連資料の収集に日常的・継続的に取り組み広く公開するとともに、若手・現役および現役を退いた名誉教授クラスの研究者等、世代的にもバラエティー豊かな研究員がそれぞれの専門分野を活かして、これら蔵書を研究対象とした基礎資料研究に共同して取り組み、その成果を国内外に発信してきた。

これに加えて、新進気鋭の情報学の専門家の協力を得て、画像データの国際規格化や、人文系テキストデータベースの国際的ガイドライン等の導入を通して、国際的に汎用性が高く、かつ継続性・発展性のあるデータベースの構築を進めている。このデータベースに、長年にわたって研究員・研究班が蓄積した学術上の専門知識等をデジタル化して保存管理・公開するとともに、蔵書（書誌・画像）とその保存修復記録、および展示記録等のデータベースと連動させることで、蔵書を散逸させることなく継承し、国内外の学術研究の進展と一般への普及に貢献することを目指す。



これらの活動の中で若手研究者を支援・指導することで、東洋文庫の特色ある研究を中断させることなく、新たな学術的な知識を蓄積しつつ、継承・発展させていくことが可能となると考える。データベースの構築・維持には、人文学の研究者と情報学の専門家の協働はもとより、情報学を専門としながらも人文学の素養を持つ人材の育成が喫緊の課題であり、奨励研究員制度を活用するなどして若手研究者の育成に取り組んでいく。一例として、情報工学研究室と共同で情報学を専門とする大学院生に対して、東洋文庫のデータベース化事業に関する講習会や検討会を開催し、共通の関心を高める活動を行う。

また、コロナ禍を受け、新たに緊急重点化項目を設定した。

(6) オンライン事業の重点化と、データベース化による資料情報の発信の強化

コロナ禍の現況にあっては、国内外へ出張しての資料調査や研究会・シンポジウム・ワークショップの開催・参加が制限される。先行きが不透明ななか、オンライン会議システムを活用して国際シンポジウム・ワークショップ等を開催することで、移動にかかる時間と距離を超えて国内外の研究者が交流を行うなど、コロナ禍に屈することなく、新しい研究の形を模索していく。

上記の研究事業を推進するに当たっては、審査結果の所見を受けて、これまで以上に調査・研究対象となる史資料にかかわるプライバシー権・肖像権等「人権の保護・法令の遵守」に対する多面的な配慮が必要となる。そこで、2021年2月に全研究員に対して「人権の保護・法令の遵守」に関するアンケートを実施した。これをもとに想定される問題点を洗い出し、研究倫理委員会等をチェック機構として機能させるなどして、権利に抵触しないための方策を継続的に検討していく。具体的には、多様な映像・写真資料データベースを東洋文庫全体として総合的に管理することによって、人権・肖像権の保護に関わる映像・写真資料を全体的に掌握する取組みを行う。

研究事業の効果

本研究の関連研究分野に対する貢献度および期待される成果等について、これまで蓄積されてきたデータベースの一体化とその総合的運用に向けた取り組みを軸に、研究項目に分けて説明する。

I. アジア基礎資料研究

総合アジア圏域研究班の研究データベース共同研究担当者のもと研究部・図書部・普及展示部より担当者を加えたチームを結成し、蔵書・保存修復記録・展示記録・研究

の各データベースの連携に向けた取り組みを進める。東洋文庫で行われる研究・図書・普及の諸活動のすべてをこのデータベースに集積していくことで、研究資源データの保存・管理・公開・利活用が効率的・効果的に行えるようになる。

担当	担当者（所属）
研究データベース共同研究・総括	會谷 佳光（東洋文庫研究部主幹研究員）
研究データベース共同研究・副総括	相原 佳之（東洋文庫研究部研究員）
データベース・連携システム構築、技術支援（Linked Data、IIIF、TEI）	中村 覚（研究協力者、東京大学史料編纂所助教）
N-gramを活用した人文情報学の推進	中塚 亮（東洋文庫図書部奨励研究員）
蔵書データベース連携協力	瀧下 彩子（東洋文庫図書部主幹研究員）
保存修復記録データベース連携協力	篠崎 陽子（東洋文庫図書部研究員）
同上	水口 友紀（東洋文庫保存担当臨時職員）
同上	田村 彩子（東洋文庫保存担当臨時職員）
展示記録データベース連携協力	岡崎 礼奈（東洋文庫普及展示部主幹研究員）
研究データベース紙質分析担当	徐 小潔（東洋文庫研究部研究員）
同上	多々良圭介（東洋文庫研究部奨励研究員）
研究データベース古地図担当	相原 佳之（東洋文庫研究部研究員）

II. 資料収集・整理

東洋文庫の蔵書をクオリティーアップしうる貴重資料を積極的に収集し、書誌データを登録し、保存修復措置を施してデータベースに記録し、さらにデジタル撮影・IIIF化を行った上で、書誌データと連携した形で公開する。これによって東洋文庫研究員による研究活動の活発化を促すとともに、研究データの蓄積をスピードアップすることができる。対外的には、これまで東洋文庫に来館しなければ資料を閲覧できなかった遠方や海外在住者の利用を促すことができる。

III. 資料研究成果発信

東洋文庫では、2018 年度よりすべての刊行物を電子化して東洋文庫リポジトリ ERNEST (<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>) 上にてデジタル発信している。今後は刊行物の研究情報をデータベース上で書誌データ・IIIF 画像・TEI テキスト等と連携させることで、蔵書から研究、研究から蔵書といった双方向での学術的な研究成果の発信を可能とする。

IV. 普及活動

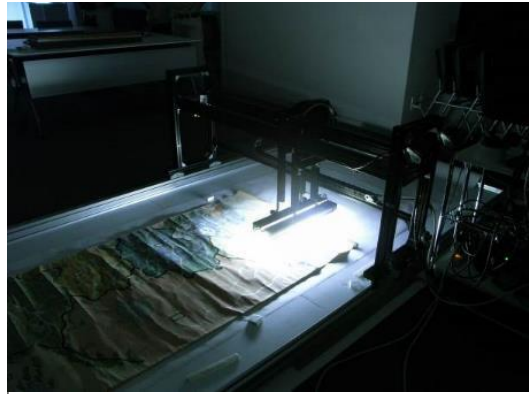
コロナ禍を一つの契機として、従来の対面での講演会・シンポジウム等の開催に加えて、オンライン開催を実施していく。これによって遠方や海外在住者の参加が容易となり、より広範囲に研究成果を発信・普及することが可能となる。

東洋文庫はパーソナルコンピュータの草創期に書誌情報の電子化を開始したため書誌データが特殊化して、これまで CiNii など他の OPAC システムと連携可能な OPAC システムへの登録が一部の資料（近現代中国、イスラーム関係）でしか進んでいなかった。データベースの一体的運用に当たり、従来の書誌データベースはリンクトデータ化の障碍となるため、書誌情報の OPAC 登録を推進する。これによって研究者・一般の利用者はより一層東洋文庫の所蔵情報に容易にアクセス可能となる。

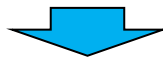
最後に、東洋文庫における資料の収集・保存修復、研究データベース構築・国際発信、一般への普及が一連の流れで行われた事例として、次頁に『大明地理之図』4 軸（細谷良夫研究員寄贈、江戸時代書写）を取り上げる（紙質調査は参考までに国宝『文選集注』の展示パネルを例にあげる）。



保存修復技術者による修復



専門業者による撮影



ミュージアムでの展示

国宝『文選集注』の紙

楮（クワ科）を主原料とする楮紙と、雁皮（ジンチョウゲ科）を主原料とする雁皮紙は和紙の代表格です。『文選集注』の紙は、図①のように繊維が同じ方向に流れています。これは、和紙製造特有の手法「流し漉き」によるものです。図②には楮の樹皮が残っていて、日本の楮紙であることが分かります。平安時代以降、重要な書物には雁皮紙を、プライベートな書物には楮紙が使われていました。この書物はプライベート用のものだと考えられます。

(図①) ×100倍

(図②) ×200倍

ミュージアムでの紙質調査成果の展示紹介



Overview: Usage example of the map

A. Image in compliance with IIF

B. Annotation

C. Images to interactive maps

Research / Exhibition

Georeferencer

Old Maps Online

2

情報学の専門家中村覚氏による研究データベースの試作



国際シンポジウムでのプレゼンテーション

【2021 年度】



東洋文庫水経注図データベース 長安

検索結果: 96 1 / 4 < > 24件 冊...

冊 (3件)	図 (3件)
<input type="checkbox"/> 4 4 (x)	<input type="checkbox"/> 長安城図 88 (x)
<input type="checkbox"/> 5 3 (x)	<input type="checkbox"/> 本図 7 (x)
<input type="checkbox"/> 8 89 (x)	<input type="checkbox"/> 越南 1 (x)

すべて表示 ▶

地名	記号	拡大図
長安	行政: 郡名	本図 ↗
長安城圖別詳	記述: 別図参照	本図 ↗
長安	行政: 省名	本図 ↗

大明地理之図 DB プロトタイプ版作成の経験を活用した水経注図 DB の構築



【2022 年度】

水経注図 DB の構築経験をフィードバックして、大明地理之図 DB に地名等データ約 3,800 件を登録して地図画像と連携させ、一般公開を目指す。

公的研究費の管理・監査にかかわる体制強化

2021年2月1日に「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」（平成19年2月15日文科科学大臣決定）が改正された。その趣旨および内容を踏まえ、令和3年度において、公的研究費等にかかわる不正防止に関連する規定・規約の類の全般的な見直しを行うとともに、監事との連携を強化し、さらに大学等研究機関において副学長・常務理事等の役職を経験し、機関全体の監査業務の経験がある者を東洋学連絡委員会の「監査担当委員」に任じ、内部監査委員会・監事等と連携して、内部監査の質的向上に努めるなど、より実効性のある体制整備に取り組み、ガイドライン改正への対応を一つの契機とした不正防止対策の抜本的な改革を実施した。

令和4年度以降、この体制のもと、引き続き全構成員に対するコンプライアンス教育・啓発活動を、組織の隅々まで行き渡る方法で実施して、不正を起こさせない組織風土の形成に取り組みつつ、さらなる体制の整備・強化とそれによる実効性の確保を目指す。以下に東洋文庫の不正防止対策の取り扱いに関するフローチャートを示す。

公益財団法人東洋文庫における不正防止対策取り扱いフローチャート

常務会	
理事長:最高管理責任者	文庫における公的研究費等の適正な管理及び運営についての最終責任を負う
専務理事:統括管理責任者	最高管理責任者を補助し、管理・運営について文庫全体を統括する実質的な責任と権限を持つ
研究担当の業務執行理事: コンプライアンス推進責任者	コンプライアンスに関する具体策等を実施し、統括管理責任者に状況報告を行う
その他常務理事: コンプライアンス推進副責任者	コンプライアンス推進責任者を補助し、自己の管理部署で具体策等を実施し、推進責任者に状況報告を行う

**コンプライアンス委員会
(防止計画推進部署)**

コンプライアンス(法令遵守)体制の強化
法令違反に対する是正措置・再発防止策
不正防止計画の策定及び見直し等
内部通報者・相談者の保護
不正行為等に関する調査、審査等

人員構成:
理事長(委員長)、専務理事、
研究担当の業務執行理事、
その他

内部監査委員会

公的研究費等の書面審査と実地監査の実施
モニタリングの実施・体制整備・検証
公的研究費の管理体制に不備がないか検証
その他内部監査に関すること

人員構成:
理事長(委員長)、専務理事、
各部部長、会計課長、その他

報告

通報窓口
監事
総務課

文庫内外からの通報

予備調査の実施

予備調査委員会

人員構成:
コンプライアンス委員会
メンバー

調査の要否を判断

本調査委員会

人員構成:
コンプライアンス委員会
メンバー、第三者委員

不正行為等の認定

処分検討委員会

人員構成:
東洋学連絡委員会の監査担当委員
(委員長)、
研究担当の業務執行理事、
総務部長、研究部長、
研究部課長、その他

**東洋学連絡委員会
(監査担当委員)**

内部監査委員会・監事等と連携して、
内部監査の質的向上に努め、東洋学
連絡委員会において文庫の運営体制
全般について提言を行う

事務処理・使用ルール相談窓口

会計課 研究部

図書部 研究部 普及展示部 総務部

報告・意見

具体策の実施、受講管理・指導、モニタリング、改善指導、状況報告

提言

連携

相談

監事

- 不正防止に関する内部統制の整備・運用状況の確認
- 不正防止計画が不正発生要因に対応しているか確認
- 防止計画推進部署・内部監査委員会との連携
- 常務会等において定期的に報告し、意見を述べる

2021-2023 年度特定奨励費「事業計画調書」に対する審査結果の所見と対応

2021-2023 年度特定奨励費事業計画調書に対して、文部科学省より通知された審査結果の所見において、膨大かつ貴重な資料のデータベース化・デジタル化の取り組みが高く評価される一方、(1) プライバシー・肖像権など「人権保護・法令遵守」に係わる史資料が少なからず含まれることから、データベース化・電子化の際、問題点を洗い出し、権利に抵触しないための方策を改めて検討すること、(2) データベースの継続的な構築・利用のためには若手研究者の育成が重要であり、とくに質の高いデータベースの構築・維持には、人文学の研究者と情報学の専門家の協働に留まらず、情報学を専門としながら人文学の素養を持つ若手人材の育成にも取り組むことが求められた。

(1) の指摘を受け、全研究員に対する人権・肖像権の保護に関するアンケートを実施し、他機関での対応事例も参考に「研究計画実施における人権の保護と肖像権の取り扱いに関する指針」(<http://www.toyo-bunko.or.jp/about/joho/jinkenhogotosyozoken.pdf>) を策定し、2021 年 9 月 21 日施行した。

肖像権の問題については、デジタルアーカイブ学会において、デジタルアーカイブの構築に取り組む機関において、本来デジタルアーカイブに保存され、活用されるべき多くのコンテンツが、肖像権の判断ができないという理由で死蔵化あるいは消滅する危機に直面している現状に対して、機関の現場担当者が肖像権処理を行うための拠りどころとなるようなガイドラインを提案するべくガイドラインの作成を進め、確定版として、2021 年 4 月 19 日に「肖像権ガイドライン～自主的な公開判断の指針～」

(<http://digitalarchivejapan.org/bukai/legal/shozoken-guideline>) を公開した。肖像権に抵触するかいなかの判断基準をポイント制（被撮影者の社会的地位・活動内容、撮影の場所、撮影の態様、写真の出典、撮影の時期）によって客観化したもので、東洋文庫でデータベースを構築する際にも大いに参考となる。

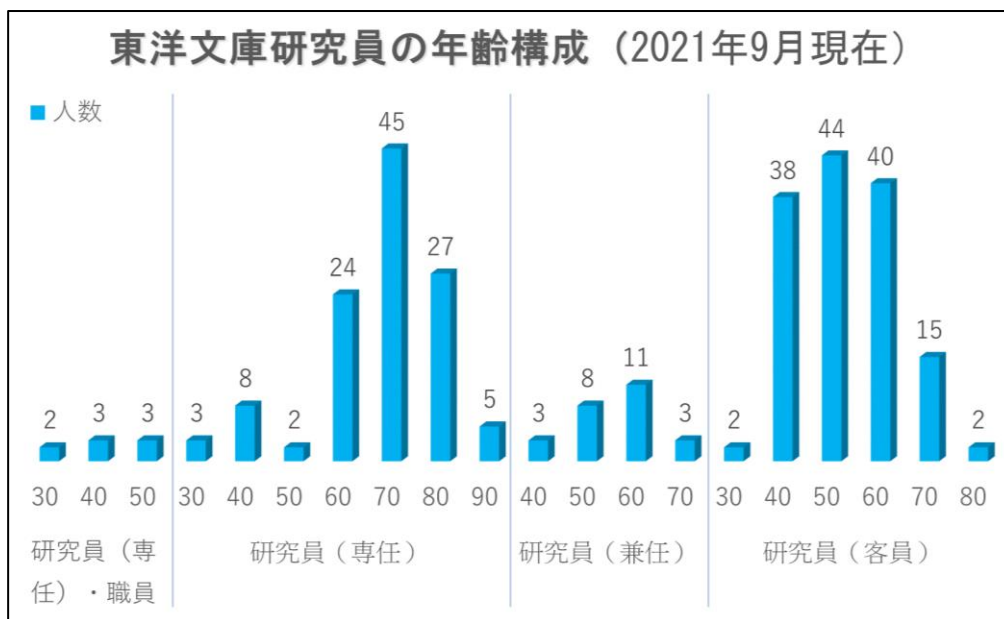
人権・肖像権の問題は、特定奨励費や科学研究費だけでなく、図書・ミュージアム・出版など東洋文庫全体の活動にかかわるものであり、東洋文庫の全事業の中でこの問題をどう考えるか慎重に検討し、東洋文庫の方針をホームページ上で情報公開する必要があり、今後も常務会・研究倫理委員会等の場で継続的に検討・審議していく。

また、(2) の指摘を受けたことを踏まえ、若手研究者、とくにデータベースの構築・維持に必要な若手人材の確保・育成が喫緊の課題となっている。これに加えて、2021 年 3 月 26 日付の文部科学省「競争的研究費における制度改善について（通知）」の中で、日本の研究能力の向上のため、競争的研究費のプロジェクトで雇用する博士課程学生の時給を 2,000～2,500 円とすることが求められ、2021 年 4 月以降募集する研究課題より順次適用することが通知された。具体的な支給額については、研究機関が個別に判断することが認められており、上記の水準以上または水準以下での支給を制限するものではない。東洋文庫では、従来、研究員の紹介や研究会の参加者等から、専門的知識のある大学院生・ポスドクを補充している。しかしながら、これらの人材は研究機関だけでなく各界での需要が非常に高く、優秀な人材を確保するためには給与面を含めた待遇の改善が必要である。そこで、2022 年度から臨時職員の時給を増額するため、予算配分の変更を行った。

コロナ禍の研究活動に対する影響と課題

今般のコロナ禍は、東洋文庫の研究活動に対して多大な影響を及ぼしている。

東洋文庫の特徴は、名誉教授クラスのベテラン研究者、現役の教授クラスの中堅研究者、非常勤講師・助手等の若手研究者が一堂に会して研究会等の場で、互いに刺激を与え合って研究を行っている点にある（下図参照）。また、東洋文庫の取り組む歴史資料の研究は、国内外の大学・研究機関への現地調査、研究会・学会への参加・報告、学術交流など、従来、人の移動によって実施されてきた。



これが2020年3月以降の新型コロナウイルスの感染拡大によって、一転極めて困難となり、研究活動の停滞が現実問題として発生している。その一方で、従来は人が移動しなければ実現できなかった研究会・学会の開催、学術交流などがオンライン会議システムの普及により、居住地にかかわらず実施できるようになった。研究活動のオンライン化はコロナ禍があったからこそ急速に普及したわけであるが、東洋文庫のように、高齢の研究員が多い研究機関の場合、パソコンの得手不得手によって研究会等への参加を断念する方も当然出てくる。

上述のとおり、東洋文庫の研究活動は、ベテラン・中堅・若手の各年代の研究員の交流によって継承・発展してきた。一方、東洋文庫では、コロナ禍の終息後も、研究活動のオンライン化を進めていく計画を立てている。今後、研究活動のオンライン化と、研究活動の継承・発展を両立させていく上で、高齢の研究員の研究蓄積の活用と若手研究のさらなる推進をどのように進めていくかが重要な課題となっている。

I. アジア基礎資料研究

「概要」の「2021-2023年度の特定奨励費による研究事業の目的」（pp.2-3を参照）に提示した5つの重点事業項目について、2018-2020年度はとくに紙質調査・研究データベースの構築・若手研究者の育成に重点を置き、研究を推進してきた。2021-2023年度は、この方針を維持しつつも、より研究データベースを基軸に据えた計画を立てている。

具体的には、各研究班や研究員が現在取り組んでいる研究や過去の研究成果、およびその副産物である研究データ資源（カード、ノート、写真、動画、注釈、索引、刊行物等）を研究データベースに取り込んでいくとともに、これを蔵書（書誌・画像）、保存修復、展示等の情報にかかわるデータベースと連動させ、東洋文庫に所属する様々な世代の研究員・司書・学芸員が一体となって運用するデータベースを構築する。

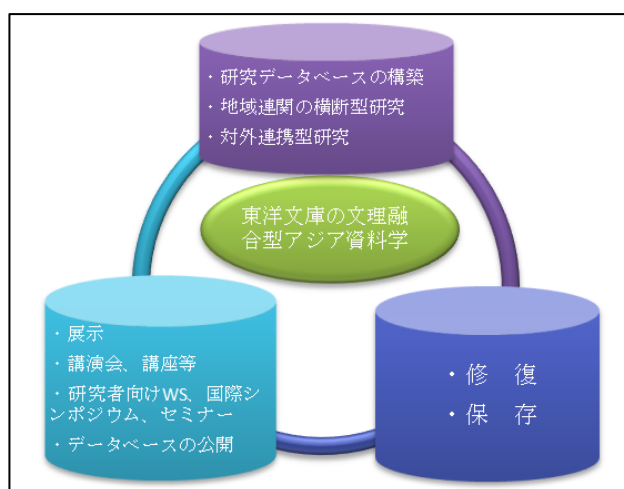
今期の主な研究活動としては、紙質調査の推進（紙の見本帖からのサンプル収集、中国地方志・族譜からの地域別・時代別の中国紙データの収集・分析等）、古地図データベースの構築（『水経注図』『大明地理之図』等）、訳注・校閲成果のTEIデータベース化（中東諸国の諸憲法の訳注研究、西アジアの契約文書校閲研究等）、旅行記情報のデータベース化（近現代中国、東南アジア）、国際共同研究（ロシア科学アカデミー東洋写本研究所（IOMRAS）所蔵の非漢語文献（ロシア側の事情により2021年度より中断）、チベット写本大蔵経等）に取り組んでいる。コロナ禍の状況次第では、旅費を使っている現地調査等の実施が困難となる可能性があるが、その場合はデータベースの購入や文献複写等で資料を入手する。

研究データベースのシステム開発に当たっては、2018-2020年度に引き続き、情報学を専門とする若手研究者の協力を得た。また、データの収集・整理は大学院生やポストドクの協力を得た。また、重点事業項目の実施に当たっては、研究会や国際シンポジウム・ワークショップの開催による成果発信・意見交換が必須であるが、コロナ禍の影響でオンライン開催が増えたため、パソコン等機器の整備等に取り組んだ。

(1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開

担当：會谷佳光
相原佳之
片倉鎮郎
清水信子

東洋文庫には、若手・現役および現役を退いた名誉教授クラスの研究者等、世代的にもバラエティー豊かな研究員が283名在籍し、それぞれの専門分野を活かして共同研究を行ってきた。一方、東洋文庫の伝統的なアジア基礎資料学を継承・発展させるため、貴重洋書と古典籍の保管・修復・公開、ならびにアジア各地域に関する一次資料の継続的かつ系統的な収集・保存・公開、さらにそれらを活用した基礎的かつ長期的なアジア基礎資料研究に取り組んできた。そこで、2021-2023年度は「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」（p.32を参照）を設定して、東洋文庫所蔵の貴重アジア資料を対象とした伝統的かつ組織的研究を継続している。



アジア基礎資料研究については、とくに、2018-2020年度の重点課題であった所蔵資料の紙質調査に重点を置いた研究活動に継続して取り組んでいる。東洋文庫所蔵資料からアジア各地域の紙質情報を系統的に調査収集し、その結果を比較分析することで、古今東西のアジア関連資料の紙質について総合的な国際的分析標準の作成に取り組んだ。これによって、研究者個人の経験と熟練に依拠し、国・地域・言語で分断された従来の書誌学の限界を克服するとともに、地域文化の表象である紙をめぐる「知識」の交流史研究に貢献することを目指す。

また、東洋文庫における研究活動・閲覧公開・ミュージアム展示等のすべての局面において、日常的に所蔵資料の紙質調査を実施し、その成果を蓄積して保存修復への活用に取り組んでいる。これによって、東洋文庫が収集した古今東西の貴重資料を永く後世に伝承するとともに、その成果をミュージアムで展示し、研究データベース化して広く発信することで、国内外のアジア関係資料の継承・伝承に貢献する。すなわち所蔵資料の紙質調査と研究データベースによる成果発信は一体不可分であり、東洋文庫が研究図書館として取り組む特色ある研究活動の中心をなす課題であると言える。

現地研究機関との共同研究については、東洋文庫は長年にわたる現地研究機関との学術交流によって築き上げてきた信頼関係のもと共同研究を行ってきた。特徴的な活動としては、中央アジア研究において、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所（IOMRAS）との協力関係・信頼関係のもと、中央アジア出土のウイグル文書の編集を共同で行い、20年間にわたり継続的に目録の編集に取り組み、現在はこれをデータベース化してデータの充実に取り組みつつ内部公開するとともに、IOMRASとの共同編集によるカタログの編集刊行を進めている。同様に、協力協定機関であるアメリカのハーバード・エンチン研究所や、台湾の中央研究院等との間で長年にわたって調査協力・国際共同研究・資料交換・人材交流等を行っている。このような研究機関相互の信頼関係に基づいて長期間にわたって継続的に行われる研究活動は、個人や研究グループが短期的に実現できるものではなく、東洋文庫が研究図書館として実施するのにふさわしい事業であるといえる。2021-2023年度もアジア基礎資料研究推進のため様々な現地研究機関と国際共同研究に取り組んでいく。

〔研究実施概要〕

資料のデジタル公開等による図書館の電子化が進む中、資料の現物（書籍・地図・絵画・考古遺物・陶器等）からしか読み取れない情報（紙・墨等の素材や生産された時代・地域等）を分析・研究・蓄積・公開していくことは、アジア・ヨーロッパの様々な時代・地域の資料を所蔵する東洋文庫だからこそ実現可能な研究課題である。

そこで、**総合アジア圏域研究**では、「アジア資料学における Digital Humanities の探求と活用—研究・蔵書・保存修復・展示のための連携データベースの構築」をテーマに、東洋文庫の伝統である時代縦断的・地域横断的な人文学的研究手法に、情報学の専門家によるデジタル技術を組み合わせることで、文理融合型アジア資料学の道を探求しつつ、これを活用し、アジア基礎資料研究の継承・発展に取り組んだ。

2021年度は、精密顕微鏡を用いて、紙の見本帖『中国古籍修復紙譜』（浙江図書館編、国家図書館出版社、2017年）等からのサンプル収集や、中国の地方志・族譜からの地域別・時代別の中国紙データの収集・分析を日常的・継続的に進めた。『中国古籍修復紙譜』からは、計15,000余枚の画像データを撮影した。さらに、単独の資料群の紙質データとして『永楽大典』12冊を調査し、1,174枚の画像データを蓄積し、その成果として、徐小潔「『永楽大典』紙質の初歩的分析—非破壊調査の試み—」を『東洋文庫書報』第53号に掲載した。ま



精密顕微鏡調査の様子

た、紙の表面からの不要な反射光や照明のホットスポットを除去し、より鮮明に紙の繊維を観察するため、精密顕微鏡専用の同軸偏光フィルタを導入した。

2021年10月6日～2022年1月16日開催の「ミュージアム開館10周年記念 東洋文庫名品展―「東洋学」の世界へようこそ―」に協力し、国宝『文選集注』、『永楽大典』、『ターヘル・アナトミア』、『解体新書』、『世界の鏡』（ミュテフェリカ版）などの紙質の調査データを提供した。

東洋文庫は、2024年に創立100周年を迎える。そこで、「東洋文庫創立100周年記念事業」を立ち上げ、総合アジア圏域研究班のもとに記念事業連絡委員会を設置して、各研究班・研究グループと共同して、①学問・研究、②書誌・目録、③展示・ミュージアムを柱に、データベースの構築、出版物の編集・刊行、記念講演・国際シンポジウムの開催に取り組んでいる。2021年度は、ミュージアム開館以前に発行された展示目録について、目録内に記載される書誌のリストアップとデータ入力を実施した。

2020年度にフランスの東洋学者アンリ・コルディエ（Henri Cordier 1849-1925）の旧蔵書「コルディエ文庫」が永青文庫より寄託された。これを受け、2021年9月に東洋文庫研究員を中心にコルディエ文庫研究会を結成した。研究会では、コルディエ文庫に含まれる書籍の中から担当者が輪番で解題を作成し、それを検討する形で研究を進めている。東洋文庫創立100年（2024）～コルディエ没後100年（2025）を目途に文献解題の完成を目指す。

現代中国研究における今期の調査・研究の対象は、「戦後日本人中国旅行記」、「汪精衛政権駐日本大使館文書」、「入江貫一満洲国宮内府関係資料」、「片倉衷関係文書」等、戦前から戦後にかけての日中関係史に関する史資料群である。国際関係・文化グループは、これらの史資料の目録づくりや基礎的整理を進めるとともに、数年後のデータベース化を目指した作業に取り組んでいる。とりわけ「戦後日本人中国旅行記」については、2020年度に東洋文庫リポジトリに成果の一部を公開した後、関連する資料を継続して収集しており、関係者へのインタビュー記録等も作成している。また、それらの研究成果は、国立国会図書館関西館との合同企画「新たな現代中国研究の推進」（2021年4月17日オンライン開催）で社会に向けて積極的に発信した。経済グループでは、2021年9月27日（発表者：加島潤、松村史穂）、11月22日（発表者：峰毅、木越義則）にオンライン研究会を開催した。

現代イスラーム研究では、中東・中央アジアの歴史的に重要な諸法令を翻訳して順次データベース化し、東洋文庫のリポジトリで公開していく作業の一環として、トルコグループでは、粕谷元編『トルコにおける議会制の展開』（東洋文庫、2007年）所収のオスマン帝国憲法（1876年）およびトルコ共和国憲法（1924年）を改訳するとともに、これらに注釈と解題を付す作業を進め、「[全訳] オスマン帝国憲法」を完成し、イラングループでは、1906-07年イラン憲法およびイラン・イスラーム共和国憲法の翻訳および注釈を付す作業を進め、「[全訳] 1906-07年イラン憲法」を完成した（詳細は p. 20参照）。アラブグループでは、エジプト憲法（1923年）およびチュニジア憲法（1861年）の翻訳および注釈を付す作業を行った。前者については全条の下訳を終えたが、後者については新型コロナウイルスの感染拡大によって海外調査が困難であったため、関係資料の収集等に影響があった。これらの作業のために、イラングループおよびアラブグループでは訳文検討会をオンラインで重ねた。「シャリーアと近代：オスマン民法典研究会」（代表：大河原知樹研究員）では、研究成果公開を最終目的に、オスマン民法典（メジェッレ）のアラビア語訳の講読と翻訳作成のためのオンライン研究会を全10回開催した。イラングループでは、2月15日にオンライン研究集会を開催し、鈴木均研究員、黒田卓研究員、研究協力者の徳永佳晃氏、佐藤秀信氏、山崎和美氏、中村菜穂氏、梶山卓哉氏が報告を行った。

東アジア研究では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

前近代中国研究班では、文献史料の精密な理解と新出史料を利用した研究を両軸とした中国古代史研究の深化を目的に、原則、月2回オンライン形式で研究会を開催して、東洋文庫所蔵の豊富な中国地方志資料および東洋文庫のインターネット機能を活用し、前年度に引き続き『水経注疏』巻10漳水篇の精読を進めた。しかし平野部を流れて流路が変更する難解な箇所であるため、当初の予定よりもかなり遅れている。研究員が『水経注』に関わる問題について、国外の研究者と積極的な意見交換を行い、研究成果の寄贈を受けた。また、新出史料を利用した研究として、『嶽麓秦簡(参)』研究会をオンライン形式で月1～2回開催し、『嶽麓書院蔵秦簡』所収の律令・律令関係文書について講読・研究方法の検討などを行った(【東ア-1】)。なお、略号については、p.32「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」を参照。以下同)。

前近代中国の社会のうち、表層については豊かな記録が残され、総体として〈秩序〉と〈階層〉を特色とする様相が長期に持続したことが知られている。一方、基層社会は発展と転変、分化を遂げながらも記録の伝存が少数かつ散漫なため、統合的な分析を妨げてきた。そこで、表層と基層両面の接合、交渉の動態に目を向け、看過されてきた史料に即して事実を解明し、研究の新生面を開くことを目指した。具体的には、①近年における法制史研究の充実に沿い、地方官の裁判機構、同判決文を手がかりとして、地域、地方社会の紛争解決、利害調整の実態に克明な分析を加える作業を第一の支柱とする。②基層社会側で生活知識、実用知識の手引き「百科知識」として求められた「日用類書」、その項目をなす商人・算数・医薬・道釈・法制、また農業などの著述について、訓読と詳注を①と合わせて推進することにより、表層と基層社会の接合面の総合的、具体的な究明に従事した。明代の「日用類書」『新刻天下四民便覧三台万用正宗』巻21〈商旅門〉のほぼ全体の訳注を終えた。2021年度は訳文の見直し、関連する東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』との校合・注釈等の整理を行った。また同書巻26〈医学門〉、巻39〈僧道門〉のほぼ三分の二の訳注を終えた。このほか新たに、巻27〈護幼門〉(小児医療と医薬)と巻38〈農桑門〉(諸種の農業)の訳注を開始した。〈商旅門〉〈医学門〉〈僧道門〉は2024年度のDB公開に向けて準備作業を進める。光緒2年(1876)刊・釈頤承集・釈儀潤校(道光7年(1827)頃刊の重刻本)『参学知津』および民国初『武林進香録』・『武林進香須知』の路程書・巡礼書については、ほぼ二分の一の訳注を終えた。今後は、月例研究会で報告を行い、データベース公開へ向けた準備作業を進める(【東ア-3】)。

唐奨研究費による研究活動として、既刊『中国社会経済史用語解』〈財政〉〈経済〉〈社会〉〈公文書〉のDB(東洋文庫サーバー内コピーデータ)を利用して各用語の参考文献・引用文献の追加と解説の修正作業を進め、『増補改訂 中国社会経済史用語解』刊行に向けた準備を行った。とりわけ〈経済〉陶磁器業の項目は近年の発掘・発見の進捗に伴い大幅に旧原稿を修正した。このほか〈社会〉宗教・俗信、〈公文書〉諸項目の修正を進める予定である(【東ア-3】)。

学部学生や大学院生が東洋文庫に収蔵されている中国法制関係の史料を用いて「法と社会」の研究を行うための便宜を与えるための入門書の作成準備として、計6回(対面1回、オンライン5回)の研究会を開催し、地方在住の研究者をコメンテーターとして迎え、活発な議論を展開した。その結果、班員各自の予備報告がすべて終了し、来年度に向け『ゼミナール中国の法と社会』(仮題)の刊行の見通しを立てることができた(【東ア-4】)。

近代中国研究班では、研究成果をまとめた東洋文庫和文論叢『戦前日本の華中・華南調査』(2020年度刊)に対するオンライン合評会という形でシンポジウムを開催し、充実した討論の場を設けるとともに、若手研究者を含む約50人の参加を得た。また、本書を東洋文庫レポジトリで公開した結果、1年間に延べ2,000回以上のダウンロード数を記録した。中国、香港、台湾などの研究機関との共同研究は、新型コロナウイルス感染の拡大のため、今年度も実施を見合わせざるを得なかった(【東ア-5】)。

東北アジア研究班では、戸籍関係資料と成冊帳簿類等について、日本国内の図書館・資料館等での文献調査を予定していた。新型コロナウイルス感染症が依然として猛威を振るうなか、班員の多くが高齢者であり、感染リスクも高いため、積極的に調査を進めることが躊躇され、調査先各機関の閉館や利用制限強化等もあって、ほとんど調査できずに終わった。結果として、すでに過去に調査した文献のデータ整理や予備調査的な活動を進めたにすぎなかった（【東ア-6】）。東洋文庫のみが所蔵する貴重な清朝の文書資料である「鑲紅旗檔」（鑲紅旗滿洲都統衙門檔案）に関する研究を継続した。2019年度に吉林師範大学満学研究院と締結した学術交流協定に基づき共同研究を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、現地での交流が不可能となり、オンラインによる研究打ち合せに留まった（【東ア-7】）。東洋文庫の所蔵史料のうち、従来その書誌学上の特徴等がほとんど知られていなかったものについて検証を加えて公開することは、関係研究分野の若手研究者に裨益するところが大きい。そこで、漢文以外の言語文字を用いて記載された清代文献史料類について、これまで各専門研究領域の分野ごとに区分されて別々に登録されている現状を検証し直し、新たに清代文献史料類として総括し、これまでの登録内容に併記する方式をも含む新たなデジタル化方式で公開するための計画を立て、その整理と分析作業を進めた。その一環として、石橋崇雄研究員が東洋文庫所蔵の清朝『壇廟祭祀節次』の解説・検証作業を進め、『壇廟祭祀節次』第1冊所収の「祈穀壇」の訳注として、『清朝『壇廟祭祀節次』訳注（一）—「凡諸祭祀」「祈穀壇」—』を公刊した（【東ア-8】）。

日本研究班では、「菱川師宣絵本」29点と「仮名草子」72点の解題・図版を収録した『岩崎文庫貴重書書誌解題X』を公刊した。コロナ禍による制約のため研究員が東洋文庫に集まって作業することは困難であったが、メールやSNSを利用して編集・校正を進めた（【東ア-9】）。

内陸アジア研究では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

中央アジア研究班では、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所（IOMRAS）図書室が所蔵する突厥碑文の拓本を資料の一つとして、ドイツ、トルコ、日本を結ぶオンライン形式で「突厥碑文研究会」（現在はトニユクク碑文読解）を9回開催した（【内陸-1】）。近現代中央ユーラシア定期刊行物研究会をリモート形式で4回開催し、20世紀初頭の雑誌『シューラー』、『フェルガナの声』などに掲載されたテュルク語の論説を講読した（【内陸-2】）。

日本はかつて敦煌・吐魯番文書やその文物の研究で世界をリードしてきたが、今日では衰退傾向にある。この現状を改めて新たに隆盛に導くには、共同研究を着実に進め、中堅・若手研究者を育成して研究成果を発表していくことに努めるより道がない。東洋文庫はこの分野で多くの文書研究の成果を上げているものの、戦前来、日本国内の諸機関や個人に所蔵されてきた多数の文書類について、その所蔵状況や内容の系統的把握と集約が十分でない点が課題として残っていた。来日した中国側研究者が着手してはいるものの、必ずしも徹底したものではなく、また、本来これは日本側の研究者が責任を持って調査し、データ化をはかる必要があり、これを実現可能なのは東洋文庫を措いて他にないと考えた。2021年度は、日本に所在する敦煌・吐魯番関係文書の所在状況の概況を把握した上で、国立国会図書館の文書を、紙質を含めて実地調査する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により実施できなかった。また、敦煌・吐魯番文書の研究に生涯をかけて従事した土肥義和研究員（2020年3月14日逝去）が残された膨大な「土肥義和敦煌吐魯番文書調査資料（通称「土肥ノート」）」の整理に入った（2017年度寄託。ダンボール10箱）。これらは、長年世界の諸機関で調べた原文書の膨大な整理ノートであり、そこには文書一点一点に対して手書きの釈文やコメントが付され、当該研究の貴重な材料となるものである。2021年度に入り、土肥氏のご遺族（夫人）で東洋文庫研究員の土肥祐子氏から、「土肥ノート」の整理と当研

究班の活動進展のために資金を提供いただけることになり、整理作業が大幅に進展した。寄託資料の概容は、厚めの大学ノート・資料やメモを収めたバインダー計51冊、他に未整理資料で段ボール2つ分（当面関係のかたまり単位で封筒に仮保存。全体の枚数未詳）である。ノートの整理について、2020年度はわずか5冊であったが、2021年度はノート・バインダー15冊分（1,676枚）のチェックを完了した。少しでも早く資料の全容を把握し、国際敦煌プロジェクト（IDP）に掲載される実文書（写真）との対応関係を明らかにし、2021年度からの3か年計画のプロジェクトとして全容を把握する予定である。また、2020年度に刊行した『濱田徳海旧蔵敦煌文書コレクション目録』について、その後、コレクションに含まれる重要文化財指定の「絶観論」と「暦代寶法記」の全体写真が発見された（目録作成時は未発見）。また東京大学経済学部資料室での調査を通じて濱田徳海の自筆メモが見つかり、その筆跡から従来「極秘」とされた作者不明の「濱田コレクション目録」が、濱田本人の手になることをほぼ確定できた。今後こうした新発見資料を用いて、さらに補充作業を進めていく。上記の研究活動の拠点である内陸アジア古文献研究会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けながらも、オンライン形式で全6回開催した（【内陸-3】）。

チベット研究班では、チベットの歴史、言語、宗教（仏教・ボン教）、社会に関する一次資料の基礎研究として、トゥカン著『西藏仏教宗義』、『阿闍世王経』蔵・漢諸本校訂対照テキスト』、中央アジア出土チベット語文献、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』について調査・研究した（【内陸-4】）。

インド・東南アジア研究では、インド・東南アジアの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

インド研究班では、12~16世紀北インドのヒンドゥー王権の刻文を中心とした史料研究、近世ムガル帝国の公文書の研究、南インド10~16世紀のヒンドゥー王権のカンナダ語を中心とする公文書の研究、10世紀以前のサンスクリットおよびプラークリットの文献資料研究、インド洋交易をめぐるアラビア語・ペルシア語・インド現地語の資料研究等を行い、その実施状況を2021年9月にオンライン形式の研究会で報告し討論した。また共同研究の成果の公表のため、欧文による出版（TBRL シリーズ）を企画した（2024年度刊行予定）（【南ア】）。

東南アジア研究班では、研究テーマ「近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」を推進するため、原則、月3回の研究会を開催した。2021年度は、一昨年度から講読してきた17世紀の終わりにサファヴィー朝下のペルシアからシャムのアユタヤ朝に赴いたペルシア使節の航海記、*The Ship of Sulaiman* (tr. by John O' Kane, 1972, London) の本文 Part II の後半の、ペルシアに帰る準備を進めていた一行がシャム王からもてなしを受けた箇所と、Part III に入り、アユタヤ滞在中に話を聞いたシャムとビルマとの戦争、シャム王のもとで重用されたイラン系住民とギリシア人フォールコーンの台頭によるその変化、シャム人の宗教や来世観念を記述した箇所を輪読した。アユタヤ在住のペルシア系住民の王朝におけるプレゼンスの変化、さらにムスリムの筆者にシャム人の仏教信仰がいかに見えたかを検討した。それを通して、近世東南アジアの港市国家として全盛期にあったアユタヤ朝が、多様な出身地の人々を抱えていたことや、その社会統合に関わる支配者や宰相の役割を考察した。輪読した箇所の本文内容の概要を、日付、トピック、概要、関連情報の諸点から整理した（Excel データ109件）。

前近代の東南アジア社会を検討するための重要な資料となる、東洋文庫所蔵の故仲田浩三氏収集の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料の整理を進めた。その目録『東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料』を2022年度に出版するための準備を進めた。

2020年度に購入した、1930年代に中部ジャワのスラカルタで建材屋を営んでいた華人の残した帳簿やメモ、ビジネス相手とのやりとりをめぐる Qiep Hong 文書（全8箱）の整理を進めた。その結果、①帳簿（華語）、②請求書、納品書、受領書、送付状（蘭、

華、マレー語)、③取引先との書簡(蘭、華、マレー語)、④社会活動関連(主に華語の中華総商会、華語学校、救国基金に関する文書)、⑤その他(写真など)、に主に分類され、当時のインドネシアの社会経済史や日中関係史の貴重な資料となることが明らかとなった。2022年度以降、デジタル化を進めるとともに、内容の分析に取り組み、Qiep Hong 文書のような東南アジア在住の華人の未公開資料が、関係史料と比較したとき、歴史研究にいかなる光を投げかけるのかを検討し、これと類似した資料を題材にした国際交流や国際シンポジウム開催の可能性を構想した(【東南】)。

西アジア研究では、京都大学主催「第20回中央アジア古文書セミナー」(2022年3月26～27日、オンライン・対面開催)に参加し、東洋文庫西アジア研究班などの研究活動を報告した(三浦徹研究員、高松洋一研究員、大河原知樹研究員など、オンライン参加)。

資料研究では、台湾の中央研究院歴史語言研究所との間の資料交換協定(2006年締結)に基づき、同研究所から漢籍電子文献資料庫(データベース、約7億8200万字)の提供を受け、東洋文庫からは貴重洋書・漢籍約10,000コマのデジタルデータを提供し、双方とも大きな研究上の利便を得た。

コロナ禍の影響により出張を伴う調査・研究会等の多くが中止となったが、緊急事態宣言が解除された10月以降、出張を伴う研究会も開催が増加している。2020年度に導入したZoomミーティング等のオンライン会議システムを活用し、オンライン形式で研究会等を開催した。研究会の開催回数と人数は、下記のとおりである。

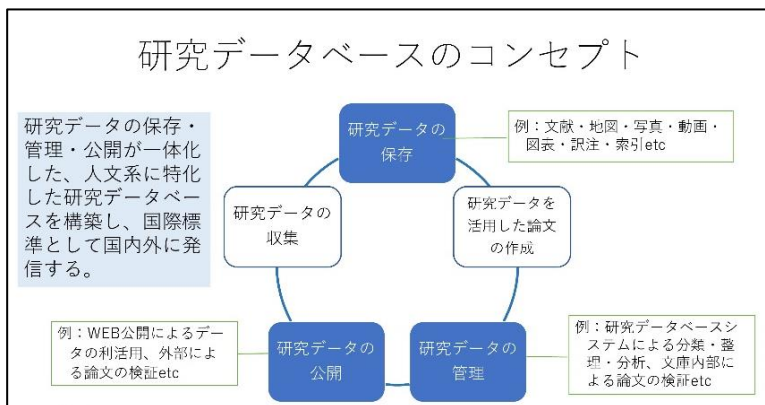
月	総回数	総人数	対面		併用			オンラインのみ	
			回数	人数	回数	人数		回数	人数
						対面	オンライン		
2021年4月	12	81	7	39	2	4	13	3	25
5	14	117	7	35	2	10	8	5	64
6	16	137	7	41	4	18	16	5	62
7	11	102	6	34	2	4	10	3	54
8	6	28	3	12	0	0	0	3	16
9	12	99	6	40	1	8	10	5	41
10	11	80	6	32	2	9	9	3	30
11	11	137	5	31	3	18	59	3	29
12	9	190	4	30	3	26	104	2	30
2022年1月	8	117	5	21	3	7	29	4	60
2月	9	134	6	26	3	16	13	5	79
3月	15	101	7	32	2	4	13	4	52
総計	134	1,323	69	373	27	124	284	45	542

(2) 総合的アジア研究データベースの推進（発展期）

担当：會谷佳光
相原佳之

全研究班が参画する**総合アジア圏域研究**では、研究部執行部の研究データベース共同研究担当者が中心となって研究データベースの構築をより一層推進するべく取り組んだ。

研究部の取り組む研究データベースは蔵書資料のデジタル化とは異なり、東洋文庫の研究員・研究班の長年にわたる資料調査・研究活動の研究成果（論文、著作、索引、訳注、図表など）およびその副産物として収集・作成された研究データ資源を、保存・管理・公開するためのデータベース・システムであり、研究データベース会議を基盤に、研究データベース共同研究



担当者が研究班・研究グループと協力して所蔵資料のデジタル撮影、およびメタデータ等の作成を進めると同時に、研究協力者の中村覚氏（東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター助教）と協同してシステム開発に取り組んだ。

研究データベース全体のタイムスケジュールについては、下図で示したように、2015-2017年度の試行期、2018-2020年度の開発期を経て、2021年度を第三段階の「発展期」に位置づけ、共通のフォーマットに基づくプラットフォームを持ち、地域横断的かつ通時代的な汎用性の高い横断検索システムを完成させ、システム開発、およびデータ収集・整理に取り組み、各研究データベースのデータの拡充、国際規格化に不断に取り組んだ。



具体的には、下記の5点に重点を置いて、個々に作成を進めている研究データを、より汎用性の高く、国際規格に沿ったものに変換し、さらに各データベースを連動・連携させることで、発展期の名にふさわしいものとなるようグレードアップに取り組んだ。

- a. 全国の大学等と国立情報学研究所（NII）が連携して進めている学術認証フェデレーション「学認（GakuNin）」（<https://www.gakunin.jp/>）や、学術情報リポジトリJAIRO-Cloudの「次期JAIRO-Cloud（WEKO3）」への移行の動向を見ながら、リポジトリを研究データの保管庫として活用し、不足があればリポジトリと連動する形で文庫独自の研究データ資源管理データベースを作り、これらからデータを抽出する形で様々な研究データベースを構築して利用・公開する。
- b. デジタル撮影した画像は、画像共有のための国際規格IIIF（International Image Interoperability Framework）に加工して、専用サーバ（令和2年度購入）に保存した上で、画像データや様々なメタデータと関係させた研究データベースを作成して一般公開していく。これによってデジタル画像に関する情報が標準化され、

その相互運用性が格段に向上し、高精細画像のスムーズな拡大・縮小、他機関が公開する画像との比較、アノテーション（画像に対するコメントやタグ等）の付与・共有等、データベースの利用者に様々な利点を提供することが可能となる。

- c. 訳注・校訂等のテキストデータは、TEI (Text Encoding Initiative) に準拠してXML形式で公開用システムに登録する。TEIは、人文系のテキストデータを効率的効果的に共有し、システム変更等の影響を最小限に抑えて継承・発展させていくことを目的に作られた国際的なガイドイランであり、画像や脚注等を関連づけることも可能である。
- d. 奨励研究員中塚亮氏の協力のもと、N-gramモデル（任意の文字列や文書を連続したN個の文字で分割するテキスト分割方法）を活用して、計量的分析手法によって、テキストデータの語彙分析、キーワード・総索引項目の抽出を行うとともに、資料の目次や見出しにタグ付けを行い、資料の時代・地域・形式別の特徴を解析することを試みる。
- e. リンクトデータ (Linked Data) を導入して、各種データの人名や地名、時間等に識別子を与え、それらを異なるデータベース間で共有することで、異種のデータを相互に関連づける。これにより、研究・蔵書・保存修復記録・展示記録等異なる種類の内部データベースと、外部のオープンデータ (Wikidata や Japan Search等) を横断して利用することが可能となる。さらに、提供する情報を機械可読な形式で提供することで第三者及び計算機による利活用を支援する。

[研究実施概要]

本年度は、中国古代地域史グループの水経注研究チームと協力して、2019年度以来構築を行ってきた「東洋文庫水経注図データベース」を11月に公開した。またチベット研究班と協力して、2019年度以来構築を行ってきた河口慧海将来チベット写本大蔵経『宝積部』全6巻のデータベース「Toyo Bunko Manuscript Kanjur」を11月に公開した（データベースの詳細は、研究グループの研究活動部分で後述）。いずれもIIIFの画像を使用したデータベースである。

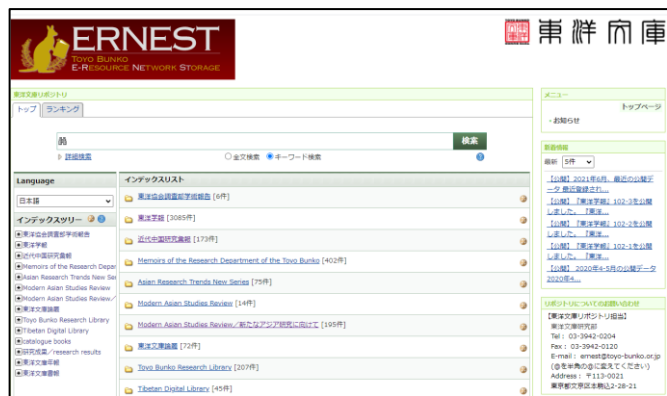
また今後TEIを活用したデータベースを構築していくことをにらみ、東洋文庫所蔵の碑文資料を素材として、導入に向けた課題などについて、中村覚氏（前出）と検討を行った。

文理融合型アジア資料学の主要課題として、紙質調査チーム主導のもと、サンプル資料として紙譜（紙の見本帖）の紙質データを収集して、紙質判断のため基準データを蓄積して、紙質調査に適した研究データベース・システムの構築を進めた。さらに蓄積した紙質データをもとに、機械学習により紙質の分析実験を進めるための準備を行い、そのための作業工程につき中村覚氏とともに検討した。

東洋文庫の刊行物のデジタル化公開をより一層推進するため、2018年9月、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」を新システム「JAIRO Cloud」に移行して以降、データの充実に努めてきた。その結果、登録データ件数は4,709件に達し（2022年3月現在）、2021年4月-2022年3月のダウンロード件数は126,016件を記録した。また、登録データへの永続的なアクセスを確保するため、本年度より登録に際してDOI (Digital Object Identifier) を付与することを原則とした。今後、研究員の研究成果やその副産物を保存管理するための受け皿としても活用していく。

東洋文庫リポジトリERNEST

<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>



2021年度東洋文庫リポジトリ「ERNEST」利用統計

年月	検索	閲覧	ダウンロード
2021年4月	1,797	4,401	6,329
5月	1,379	5,041	9,083
6月	16,447	26,065	14,574
7月	8,192	15,197	13,273
8月	2,190	7,925	12,271
9月	1,775	10,550	13,409
10月	3,869	12,079	10,387
11月	1,873	10,233	17,041
12月	1,776	8,689	8,424
2022年1月	1,716	7,439	8,845
2月	1,163	6,005	6,659
3月	2,292	4,381	5,721
総計	44,469	118,005	126,016

NIHU（人間文化研究機構）の現代中国研究資料室（2016年度に活動終了）・イスラム地域研究資料室（2015年度に活動終了）が運営していたOPAC（Online Public Access Catalog）の書誌データについて、日本事務器社製のOPACシステム「ネオシリウス」を導入してデータ移行を行い、Toyo Bunko OPACとして公開していたが、2021年9月にサーバが故障して回復不能に陥ったため、クラウドサービスへの移行を進め、2022年1月11日に稼働を開始、同2月22日に一般公開した（<https://opac.tbopac.com/>）。

従来Flashで公開していた近代中国関係日本語資料839件を、IIIF画像に変換して公開した。上記Toyo Bunko OPACの書誌情報から画像へのリンクを設定したほか、旧・現代中国研究資料室のウェブサイト（<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib1/>）においても一覧を公開した。一般公開以後、画像公開ページのページビュー数は3,175、ユーザー数は2,540となった。

2020年4月に国立公文書館アジア歴史資料センターとの間で締結したシステム連携に関する協定に基づき、東洋文庫がOPAC上で公開する近代中国関係日本語資料の書誌情報・画像データを、同センターの運用する情報提供システム（<http://www.jacar.go.jp/>）で横断検索できるよう準備した。上記839件につき、2022年3月15日に文庫側の準備作業を完了し、現在、センター側の公開手続きを行っている。

現代中国研究資料室公開・近代中国関係日本語資料

画像リンクボタン [Browse](#) をクリックすると、東洋文庫所蔵資料の全文画像が開きます。
PDF形式のリストは、[こちら](#)をご覧ください。
公開している書籍に問題がある場合には、ご連絡ください。適宜対応いたします。

請求記号	書名・責任事項	巻次	出版事項	形態的記述	叢書名	画像リンク
22	上海二於ケル匯面制度 / 中支那振興株式会社調査課[編].		[出版地不明] : 中支那振興株式会社調査課, 1940.	44p ; 26cm.	(振興調査資料 ; 第22号)	Browse
68	上海華商銀行の構成と戦後の動向 / 中支経済研究所[編].		上海 : 中支経済研究所, 1939.	60, [36]p : 図版, 表 ; 26cm.	(中支経済資料 ; 第81号)	Browse
93	維新学院一覽 / 維新学院[編].	昭和15年版.	上海 : 維新学院, 1940.	24p : 図版 ; 22cm.		Browse
96	支那蚕糸業と華中蚕糸股份有限公司 / 華中蚕糸股份有限公司[編].		上海 : 華中蚕糸股份有限公司, 1939.	92p : 表 ; 22cm.		Browse
166	満洲支那の結社と匪徒 / 満洲事情案内所[編].		新京 : 満洲事情案内所, 1941.	228p ; 19cm.	(満洲事情案内所報告 ; 第104号)	Browse
174	北支那開発株式会社及関係会社概要 / 北支那開発株式会社[編].	昭和15年, 18年度, 19年上半期.	[北京] : 北支那開発, [1941]-44.	3冊 ; 21cm.		Browse Browse Browse
225	一九三八年一月一日現在北支鉄道外国借款調査 : 長期借款及鉄道前渡金 / [南満洲鉄道株式会社]北支事務局調査部[編].		[出版地不明] : 満鉄北支事務局調査部, 1939.	30p ; 25cm.		Browse
343	北支棉作経営調査 / 興亜院華北連絡部[編].		[出版地不明] : 興亜院華北連絡部, 1941.	165p ; 25cm.	(調査所調査資料 ; 第136号. 経済 ; 第25号)	Browse

《旧・現代中国研究資料室の公開資料一覧のページ》

2022年2月24日、オンライン形式により研究データベース会議を開催し、本年度データベースの構築に携わった研究員・研究協力者による下記の報告と関連する討論を行った。後日の動画視聴も含め40名ほどの参加を得て、東洋文庫のデータベース構築方針

に関わる重要な提言を受けた。

中村 覚「持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブシステムの構築：水経注
図DB、河口慧海将来写本大蔵経DBを例として」

宮崎展昌「Webアプリケーションフレームワークを利用した大乘經典諸本対照サイ
トの構築：今後の課題と構想も含めて」

會谷佳光「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベースの活用事例—大正蔵の「宮本」
収録をめぐる—」

相原佳之「データベース構築における東洋文庫各研究班と研究部・研究協力者の協働
体制構築について」

大正蔵の宮本収録をめぐる

宮内庁書陵部蔵宋版一切経 (=宮本)
[大蔵経] (或称一切経) 1454種5733巻 附字函积音532巻 唐 特大6264帖
[北宋末] 刊(福州東禪等覺院 開元禪寺) [南宋後期] 修 京都西山法華山寺 石清水八幡宮旧蔵
宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧：https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=007075

宮内庁書陵部蔵漢籍研究会編
『図書寮漢籍叢考』(汲古書院、2018年3月)
図録編「III宋版」
「38. [大蔵経] (或一切経) 1454種5733巻
附字函积音532巻」(會谷担当)

本デジタルアーカイブは、下記の研究成果の一部です。
平成24至28年度科学研究補助金による基盤研究(A)
「宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討—デジ
タルアーカイブの構築を目指して—」(研究代表者：
住吉朋彦)
令和2年至6年度同基盤研究(A)「江戸幕府紅葉山文庫
の再構と発信—宮内庁書陵部収蔵漢籍のデジタル化に
基づく古典学—」(同上) など

2021年度に宮本画像のIIIF化と目次データの作成・公開

《研究データベース会議（オンライン）の発表風景》

現代中国研究の国際関係・文化グループでは、「戦後日本人中国旅行記」コレクションのデータベース化に取り組んだ。また、2021年度に寄贈された「入江貫一満洲国宮内府関係資料」についても目録作成の作業を終えた。いずれも2022年度以降の公開に向けて内容分析を進めた。

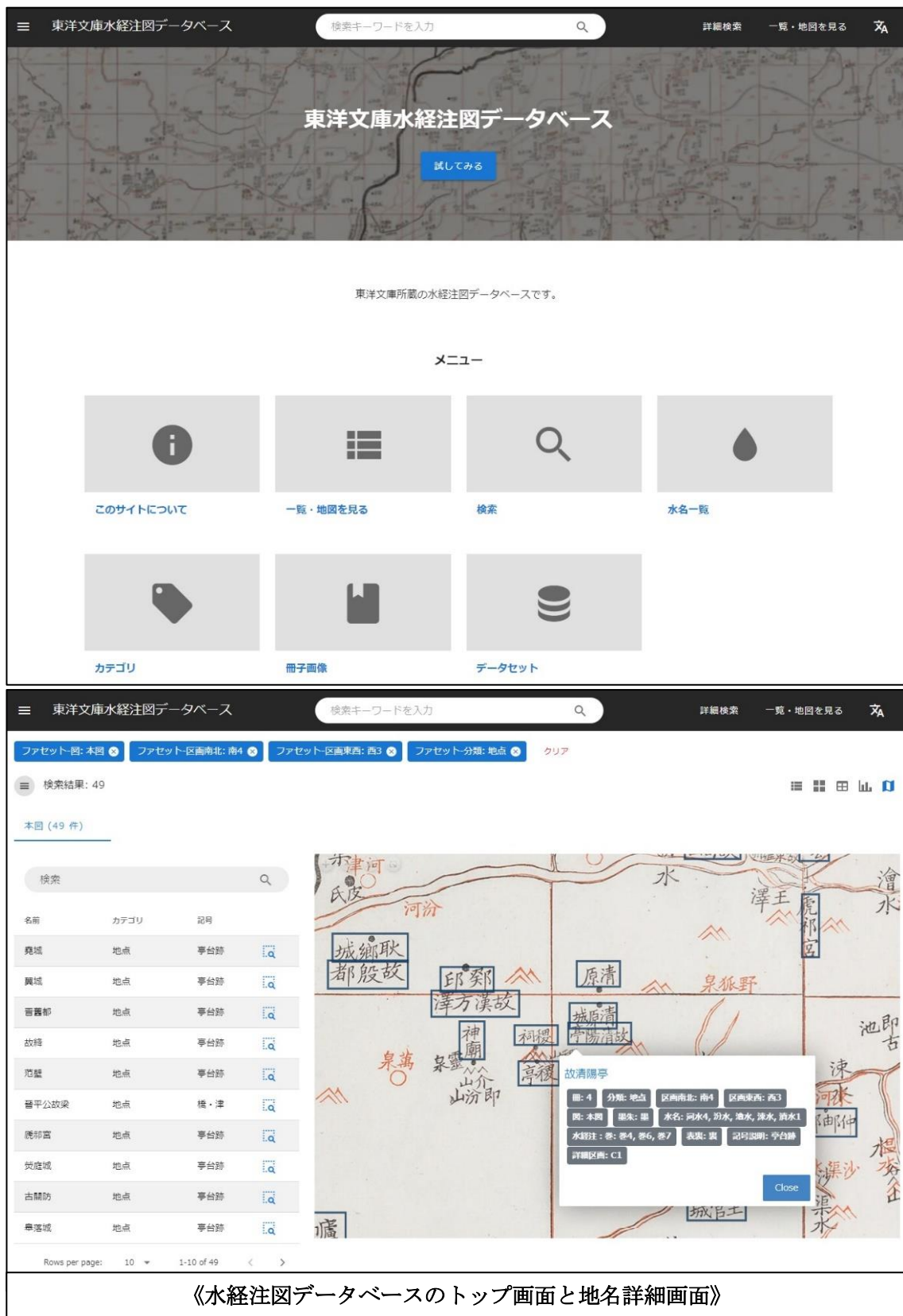
現代イスラーム研究では、「日本における中東・イスラーム研究文献DB」のアップデートを日本中東学会と連携して継続し、1,200件の新文献を「イスラーム地域研究資料室サイト」に掲載し、DB 文献総件数は61,020件（2022年3月31日現在）となった。また、中東・中央アジアの歴史的に重要な諸法令を翻訳して順次データベース化し、東洋文庫リポジトリで公開していく作業の一環として、トルコグループでは、粕谷元編『トルコにおける議会制の展開』（東洋文庫、2007年）所収のオスマン帝国憲法（1876年）およびトルコ共和国憲法（1924年）を改訳するとともに、これらに注釈と解題を付した「[全訳] オスマン帝国憲法」を3月に公開した。イラングループでは、1906-07年イラン憲法およびイラン・イスラーム共和国憲法の翻訳・注釈と解題を付した「[全訳] 1906-07年イラン憲法」を3月に公開した。

「[全訳] オスマン帝国憲法」 <http://doi.org/10.24739/00007560>

「[全訳] 1906-07年イラン憲法」 <http://doi.org/10.24739/00007561>

東アジア研究では、2019年度に着手した、中国古代地域史研究の基礎資料ともいえるべき『水経注』の研究にとって極めて有用な『水経注図』（楊守敬・熊會貞撰、光緒三十一年（1905）年宜都楊氏觀海堂刊本朱墨套印、全8冊）のデータベース構築を進めた。水経注研究チームがデータベースのアイデアの提供とデータの点検を担当し、中村覚氏（既出）との協同のもと、一枚に繋げたデジタル画像に地名等のデータを付与する作業を進め、地名や記述、図中の区画などから検索できるシステムを開発し、2021年11

月10日に一般公開した。一般公開以降のページビュー数は32,078、ユーザー数は2,314となった。非常に鮮明な画像で利用しやすく、国内外の研究者から好反応を得ており、今後さらに現在の地形と重ね合わせるなど改善を予定している（【東ア-1】）。
 東洋文庫水経注図データベース <https://static.toyobunko-lab.jp/suikeichuzu/>



「東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究」グループでは、前年度に引き続き、朝鮮半島における原三国時代～三国時代遺跡のうち、とくに墳墓のデータベースの作成を行った（Microsoft社 Accessを使用）。またこれらのデータベースと東洋文庫所蔵の梅原考古資料との対応関係について検討を行った（【東ア-2】）。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループでは、『中国社会経済史用語解』〈法制篇〉の約12,000語にわたる用語解説データのExcel入力、及び第一レイヤ～第三レイヤの項目分類をほぼ完了した。今年度も研究DB公開にむけての分類、解説文の補訂等の追加作業を継続中であり、これらのデータは既存の「中国経済史用語DB」に別途「中国法制史用語DB」として追加する予定である。このデータから抽出した約3,000～4,000項目の法制用語について形式を整え、唐奨研究費で刊行予定の『増補改訂 中国社会経済史用語解』に加えるべく準備を進めている。また『新刻天下四民便覧 三台万用正宗』巻21〈商旅門〉及び東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』の語釈1,219項目を整理し、研究DB公開にむけての補訂作業を継続中である（【東ア-3】）。

東北アジア研究班では、班員が1980年代以降に実施した、中国東北部、モンゴル、ロシア極東、同ザバイカル地方をはじめとする地域調査の画像・映像資料、各種パンフレット、地図等の資料の整理・研究を行った。故細谷良夫研究員収集の資料については、すでにそのほとんどをExcelファイルにて整理した（【東ア-7】）。クリスチャン・ダニエルズ研究員が中国雲南省で収集して東洋文庫に寄贈した碑文資料162件について目録整理、碑文の翻字を継続するとともに、研究データベース構築（IIIFによる画像公開とアノテーション機能による釈文の付加など）について検討した（【東ア-8】）。

日本研究班では、「菱川師宣絵本」全冊のデジタル画像を撮影し、「仮名草子」については『岩崎文庫貴重書書誌解題X』掲載の箇所を中心にデジタル画像を撮影した。今後、東洋文庫のデータベースに順次公開する予定である（【東ア-9】）。

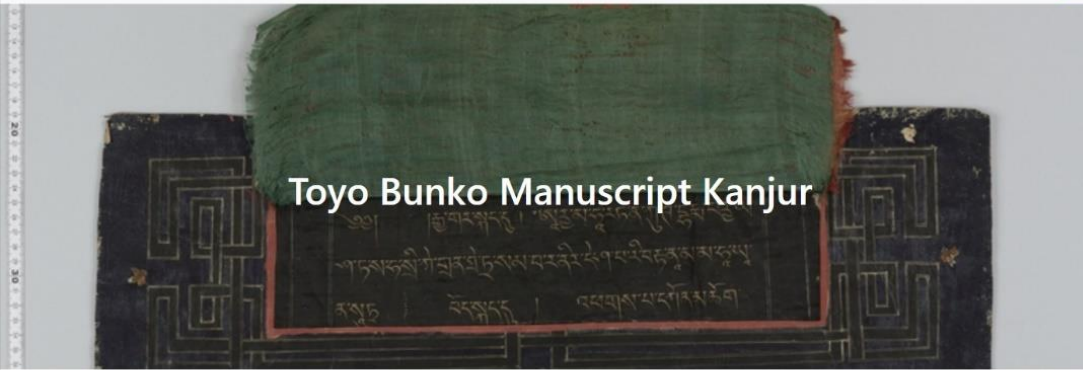
内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、2020年度に刊行した *Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1* の基礎の一つとなったマイクロフィルムのデータベースについて、すでに東洋文庫にてExcelデータを基盤として専用のシステムを構築済みであるが、上記カタログの出版によって明確となったIOMのデータを取り入れるための準備を行った（【内陸-1】）。20世紀初頭の雑誌『シューラー』、『フェルガナの声』等に掲載されたテュルク語の論説を講読し、その成果を日本語訳注の形で東洋文庫のホームページに公開する準備を進めた（【内陸-2】）。「土肥義和敦煌吐魯番文書調査資料（通称「土肥ノート」）」の整理を進め、国際敦煌プロジェクト（IDP）に掲載される実文書（写真）との対応関係を明らかにし、実文書（写真）と土肥氏の録文・コメントを並べた形でデータベース化し、東洋文庫で公開する計画である【内陸-3】）。

チベット研究班では、2020年10月にライデン大学シルク教授の研究チーム（Open Philosophy <https://openphilology.eu>）、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループ（チベット大蔵経プロジェクト <https://www.univie.ac.at/cirdis/research/buddhist-kanjur-collections-in-tibet-s-southern-and-western-borderlands>）と締結した覚書に基づき、河口慧海将来チベット写本大蔵経の『宝積部』6巻（51～56巻）について画像の共同利用を行いながら国際共同研究を進めていたが、2021年度はその国際共同研究の成果である書誌情報と解説、参考文献を付した形で『宝積部』全6巻の画像を閲覧できるデータベースを構築し、2021年11月24日に一般公開した。一般公開以降のページビュー数は1,808、ユーザー数は1,019である。また同様な公開を目指して撮影済みの『華嚴部』全6巻（45～50巻）の書誌データ作成と、般若部二万五千頌般若經典4巻（39～41・44巻）のデジタル撮影を行った。

Toyo Bunko Manuscript Kanjur

https://app.toyobunko-lab.jp/s/manuscript_kanjur/page/home

Toyo Bunko Manuscript Kanjur HOME Introduction 閲覧 Links Contact



Toyo Bunko Manuscript Kanjur

Acknowledgment

It is our great pleasure to publish the database of the Toyo Bunko Manuscript Kanjur. The Tibetan research group of the Toyo Bunko launched the project in collaboration with the Open Philology project, an ERC-funded effort based at Leiden University (project 741884), and the project Buddhist Kanjur Collections in Tibet's Southern and Western Borderlands based at the University of Vienna. Our sincere thanks are due to Prof. Jonathan Silk of Leiden University, Prof. Helmut Tauscher, Dr. Markus Viehbeck, and Dr. Bruno Lainé of the University of Vienna for their participation in the project. We gratefully acknowledge the Taishō University for permitting us to reproduce the catalogue of the Toyo Bunko Manuscript Kanjur published by Prof. SAITO Kōjun in 1977. We also thank Dr. NAKAMURA Satoru for constructing the website and JŪIN Shiori for compiling the detailed catalogue of the dKon brtsegs (Ratnakūṭa) section, the data of which are integrated into each item page. The images of the six volumes (vols. 51–56) of the dKon brtsegs (Ratnakūṭa) section are accessible here and will also be seen through the website of the Resources for Kanjur & Tanjur Studies (rKtS), Vienna (see Link). We will continue the project and publish other sections of the Manuscript Kanjur.

November 24, 2021


YOSHIMIZU Chizuko
MIYAZAKI Tensho

Toyo Bunko Manuscript Kanjur HOME Introduction 閲覧 Links Contact


アイテム

48 results / 2 ページ < >


Trisam 'vara-nirdeśa
Tibetan Title: Opening part : 'phags pa dkon mchog brtsegs pa chen po'i chos kyī rnam grangs stong phrag brgya pa las / sd..., Saito No. : 33-1, Location : Ka 1a1-Ka 55b7, D No. : 45, P No.: 760-1




Anantamukha-pariśodhana-nirdeśa
Tibetan Title: Opening part : 'phags pa sgo mtha' yas pa rnam par sbyong ba bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo /, Saito No. : 33-2, Location : Ka 55b7-Ka 121a3, D No. : 46, P No.: 760-2



Tathāgatācintya-guhya-nirdeśa
Tibetan Title: Opening part : 'phags pa de bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa zhes bya ba theg..., Saito No. : 33-3, Location : Ka 121a3-Ka 251b6, D No. : 47, P No.: 760-3



Svapna-nirdeśa
Tibetan Title: Opening part : 'phags pa rmi lam bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo/, Saito No. : 33-4, Location : Ka 251b6-Ka 294b8, D No. : 48, P No.: 760-4



《Toyo Bunko Manuscript Kanjur のトップ画面とアイテム一覧画面》

また、上記河口慧海請来写本大蔵経の『宝積部』全6巻の画像データベースを、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループのサイト（前掲）とリンクできるよう準備を進めた。河口慧海請来チベット語蔵外文献写本を解読し、チベット語活字体テキストとして入力し、電子テキストとして研究データベースの作成を行い、タクツァンパの宗義書を Tibetan E-Texts として東洋文庫リポジトリ ERNEST に公開する準備を行った（【内陸-4】）

インド・東南アジア研究のうち東南アジア研究班では、2020年度に購入した Qiep Hong 文書（全8箱）について、2022年度以降、社会活動関連文書（主に華語の中華総商会、華語学校、救国基金に関する文書）からカタログ化し、デジタル化を始める計画を練った（【東南】）。

西アジア研究では、東洋文庫所蔵のヴェラム文書（モロッコの皮紙契約文書、16-19世紀、15点）などイスラーム法廷資料研究を柱とした、比較研究の基盤となる資料のデータベース化（共有化）を進めるため、文部科学省科学研究費・学術変革領域研究（A）「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造」（イスラーム信頼学）デジタル・ヒューマニティーズ研究班のセミナーへの参加と情報交換などを通して、ヴェラム文書のアラビア語校訂テキスト、英文解題、注釈、参考文献を関連づけた総合的なデータベースの構築のための方法上の検討を行った（【西ア】）。

資料研究では、現地調査によって得られた写真・録画・文献資料の電子データ化、およびデータベース化とその公開を実施した。梅原考古資料のうち、2021年度は日本の古墳資料のメタデータの作成に注力し、全11,588件のうち4,686件（40%）を完成した。また同資料の画像撮影も進めた（計1,136コマ）。動画資料の公開にも注力し、中国演劇関係の「京劇：紅梅記」、「京劇：百花記」「台湾北管：天官賜福」「台湾北管：趙子龍救主」「黄梅戲：羅帕記」、中国祭祀儀礼関係の「シンガポール海南道士：梁太爺廟中元祭祀」「広東海陸豊道士：晩朝科祭祀」「シンガポール福州道士：Maude Road 中元祭祀」「シンガポール福州道士：鳳嶺北壇三相公神誕祭祀」、日本民俗芸能祭祀の「高千穂柚野木神楽」を公開した。



http://122.216.204.236/movie/JPN/JP_IV_1/takachiho_iwatoseven.php

最後に、2021年度までに公開済みの研究データベース・アクセス数を次頁に挙げておく。

2021年度研究データベース・アクセス数

データベース名	2021年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2022年1月	2月	3月	計
中國經濟史用語DB	19,061	19,704	19,074	19,721	19,731	19,108	19,763	19,140	19,782	19,823	17,891	19,828	232,626
宋会要輯稿食貨編 社会經濟用語DB	33,869	35,020	33,897	35,029	35,042	33,936	35,099	33,981	35,152	35,243	31,825	35,269	413,362
梅原郁編『唐宋編 年語彙索引』DB	6,248	6,467	6,261	6,474	6,478	6,274	6,487	6,283	6,504	6,522	5,887	6,526	76,411
新版唐代墓誌所在 總合目録（増補 版）DB	2,433	2,517	2,438	2,521	2,524	2,444	2,526	2,453	2,535	2,541	2,293	2,543	29,768
日本における中 東・イスラーム研 究文献DB	※2021年4月～2022年3月の期間統計												
梅原考古資料 日本繩文時代之部	54,156	55,965	54,183	56,007	56,757	54,965	56,824	55,001	56,892	56,909	51,384	57,043	666,086
同 弥生時代之部	58,267	60,276	58,337	60,291	60,308	58,396	60,363	59,016	61,082	61,155	55,206	61,278	713,975
同 銅鐸之部	133,430	138,135	135,729	140,293	141,235	136,738	141,341	136,982	141,810	141,998	128,133	142,222	1,658,046

(3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進

担当：會谷佳光
相原佳之
太田啓子

上記(1)(2)の諸活動によって得られた最新の研究成果について、国際シンポジウム・ワークショップを開催して、広く国際的に発信することで、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することを目指す。その一方で、アジア諸地域の現地研究機関・図書館との学術交流を積極的に推進することで、新たな分野の資料群を探索・収集し、研究図書館としての東洋文庫の一層の充実に取り組んだ。

国際シンポジウムの運営全般、および総合アジア圏域研究班の諸活動に携わって研究活動を補助する人材、および欧文による成果発信を強化するための人材を確保・育成するべく取り組んだ。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、研究データベース共同研究グループが中心となって、2022年2月24日、オンライン形式により研究データベース会議を開催し、本年度データベース構築に携わった研究員・研究協力者による報告と関連する討論を行った(詳細は p.20 参照)。後からの動画視聴も含め40名ほどの参加を得て、東洋文庫のデータベース構築方針に関わる重要な提言を受けた。

現代中国研究のうち政治・外交グループでは、下記のワークショップ等を開催した。

(a) 2021年6月3日、上海国際問題研究院とのワークショップ：

“Asia-Pacific Developments and China-Japan Relations”

(b) 2021年6月24日、研究報告：青山瑠妙「習近平体制下の政策決定」

(c) 2022年2月12日、講演会：牛軍（北京大学国際関係学院・教授）

「中国対外政策の形成過程」

国際関係・文化グループは、ハイフレックス型のオンラインシステムを活用して、下記のワークショップ等を開催して、海外との学術交流を積極的に進めた。

(a) 2021年5月29日、国際ワークショップ

「近現代中国・台湾をめぐる政治思想史研究の現在」

(b) 2021年9月10日、国際シンポジウム「冷戦下における日本と中華圏の人物交流史」

(c) 2021年12月3日、日中共同ワークショップ「中国当代史研究」

このうち東洋文庫所蔵の「日本人中国旅行記」関連資料を活用した取り組みが (b) である。

東アジア研究のうち**前近代中国研究班**では、「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループが、『増補改訂 中国社会経済史用語解』（唐奨研究費）の公刊される時期（2023年度）の前後を目処に、国際シンポジウムの開催を検討している。過去・現在の中国に対して強い関心が集まり、国際的に中国研究者が増大する趨勢のなか、中国史・中国史料そのものへのアクセスは容易でないとされている。その一つの理由は、中国語への習熟の困難と、中国史では史的かつ制度的枠組みの捉え方が儒教理念によって刻印されていることとが指摘されている。欧米では早くからシノロジー（Sinology）の伝統を築いたためか、中国史やその史料学に対する理解や教育法の工夫も進んでいる。将来、中国本土、台湾、欧米の専門家を招き、日本で行われているような訓読法をベースにした読解力や中国学の促進に資する若手研究者の訓練法をめぐって意見の交換がなされることを期待するが、本研究グループの「用語解」をめぐる努力も、そうした試みにおいて有力な話題を提供できると考えている（【東ア-3】）。

日本研究班では、研究成果の一般への普及を目的に、東洋学講座をオンライン開催した。プログラムについては、IV. 普及活動-A. 研究情報普及-1. 東洋学講座を参照（【東ア-9】）。

内陸アジア研究のうち**チベット研究班**では、2020年9月にチベット大蔵経とその研究史をテーマに国際ワークショップを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により開催を見送った。その代替として、河口慧海請来写本大蔵経の『宝

積部』全6巻の画像データベースを、ウィーン大学タウシャー教授の研究グループ（チベット大蔵経プロジェクト <https://www.univie.ac.at/cirdis/research/buddhist-kanjur-collections-in-tibet-s-southern-and-western-borderlands>）のサイトとリンクできるよう準備を進めた（【内陸-4】）。

インド・東南アジア研究のうち**東南アジア研究班**では、研究成果の一般への普及を目的に、「近世東南アジアの対外交流」をテーマに、東洋学講座をオンライン開催した。プログラムについては、IV. 普及活動－A. 研究情報普及－1. 東洋学講座を参照（【東南】）。

（4）研究成果の刊行・発信の強化

担当：片倉鎮郎
中村威也

日本・アジア・欧米を結ぶアジア研究の国際交流をさらに促進するため、資料研究の成果、および国際シンポジウム・ワークショップの内容を紙媒体・電子媒体（東洋文庫リポジトリ ERNEST）によって発信した。多言語による研究成果の国際発信力を強化し、資料交流・人的交流・国際交流に資するべく取り組んだ。

定期刊行物は『東洋学報』・『東洋文庫欧文紀要』（MTB）・『近代中国研究彙報』・『東洋文庫書報』・*Asian Research Trends New Series*の年間5点（8冊）、および東洋文庫の年次報告書『東洋文庫年報』を継続刊行した。

出版物の質的向上をはかるため、東洋学の知識と編集校閲技能を兼ね備えた人材を確保・育成し、かつ日本語論文を英訳するネイティブ・スピーカーの協力を得た。

今後も東洋文庫リポジトリ「ERNEST」によるオンライン出版をより強化していく。しかし、紙媒体には図書館等に設置して参照・利用に供する教育上の意義があり、かつアジア諸国との資料交換・国際交流に紙媒体の書籍が果たす役割は依然大きいことから、オンライン出版と並行して、紙媒体での出版も継続していく。

〔研究実施概要〕

現代中国研究では、中華人民共和国史（当代史）研究の最新の成果として、日中研究者の20篇の論文を収録した『集体化時代的中国——日中共同研究』を出版し、東洋文庫リポジトリに即時公開した。また、経済グループは2020年度までの研究成果を集成し、中兼和津次編『毛沢東時代の経済：改革開放の源流を探る』（名古屋大学出版会、2021年7月）として刊行し、2021年度はその英語版の作成を進めた。年度内にすべての原稿が揃い、現在最終的な編集作業を進めている。

東アジア研究のうち**近代中国研究班**では、研究成果発表の場として『近代中国研究彙報』第44号を刊行した（【東ア-5】）。

東北アジア研究班では、研究データベースの構築の一環として、1980年代以降にグループ構成員が実施した、中国東北部、モンゴル、ロシア極東、同ザバイカル地方をはじめとする地域調査の画像・映像資料等の整理・研究を行い、その研究成果の一部を細谷良夫・加藤直人・柳澤明編『清朝の史跡をめぐってⅡ—アムール流域篇—』として出版し、東洋文庫リポジトリに公開した（【東ア-7】）。また、清朝祭祀儀礼研究の一環として、石橋崇雄研究員が東洋文庫所蔵の清朝『壇廟祭祀節次』の解読作業を進展させ、その成果の一部として、『清朝『壇廟祭祀節次』訳注（一）—「凡諸祭祀」「祈穀壇」—』を刊行した（【東ア-8】）。

日本研究班では、「菱川師宣絵本」29点と「仮名草子」72点の解題・図版を収録した『岩崎文庫貴重書書誌解題X』を刊行した（【東ア-9】）。

内陸アジア研究のうち**中央アジア研究班**では、東洋文庫が所有するロシア・サンクトペテルブルクのIOM（Institute of Oriental Manuscripts）所蔵ウイグル古文献カタログとして、2020年度に *Catalogue of the Old Uyghur Manuscripts and Blockprints*

in the Serindia Collection of the Institute of Oriental Manuscripts, RAS, Volume 1. Edited by IOM, RAS & The Toyo Bunko. (Chief Editor: Peter Zieme, Compilers: Olga Lundysheva, Anna Turanskaya, Hiroshi Umemura) の編集・出版を行った。2021年度は、第2巻の編集を共同して進めていたが、IOM 側の共同研究者2名の退職により、プロジェクトを一時停止するとの通告が IOM 側からあり、編集・出版の継続が当面不可能となった（【内陸-1】）。

(5) 若手研究者の育成

担当：會谷佳光
相原佳之

東洋文庫では、若手研究者の育成にあたり、常に公益性を重視して、東洋文庫の内部にとどまらず、東洋学の伝統を継承・発展させていくことで、将来にわたって世界の研究者に裨益し、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く一般に還元することを目指している。そこで、下記の若手研究者の育成にかかわる取り組みを通して、若手研究者が自発的な研究活動等を行えるよう支援した。

1. 科学研究費の応募資格を持たない者に対する支援

東洋文庫で研究補助等の業務に従事する若手研究者のうち科学研究費の応募資格を持たない者が、日本学術振興会の科学研究費助成事業(科学研究費補助金)「奨励研究」に申請して教育的・社会的意義を有する研究に取り組む場合、所属機関として「奨励研究」にかかわる諸手続・管理を承諾することで、その研究を積極的に支援する。

2. 東洋文庫奨励研究員の任用

博士後期課程修了者については、公募・内部推薦を併用してポストドクターを選抜して「東洋文庫奨励研究員」に任用して科学研究費の応募資格を与え、東洋文庫研究員に準ずる者として『東洋文庫年報』の「役職員名簿」にも掲載し、東洋文庫の資料を広範に利用できるようにするなど待遇面の向上を行う。また、研究班・研究グループの研究協力者として資料研究・アジア現地資料調査・国際会議に参加するなど実践的な研究指導を行うことで、研究者としての早期の自立を促すなど、若手研究者の育成・雇用促進を進める。

3. インターンシップ活動等の実施

研究者育成のためのインターンシップ活動として、ハーバード・エンチン研究所の研修プログラムへの参加や、若手研究発信支援プログラムによる英語論文の作成指導等を実施する。

4. 東洋文庫諸事業への参画による実務経験の蓄積

奨励研究員経験者を、国際共同研究や国際シンポジウムなど東洋文庫の各種の公開学術活動に積極的に登用し、アジア各地における日本人研究者雇用のニーズに応える。並行して、若手研究者の参加に基づき東洋文庫の研究図書館としての機能を継承発展させる一方、『東洋学報』・『東洋文庫欧文紀要』等の学術誌の編集、資料収集・整理、および研究データベースの開発・発信等において、研究支援者として雇用して実務経験を積ませるなど、若手研究者の育成および雇用促進のための体制を一層充実させ、東洋文庫の事業の安定的・継続的な実施をはかる。

5. 若手研究者の雇用と任期中および任期満了後の支援

奨励研究員等若手研究者のためのポストとして「嘱託研究員」を設定し、各部署の諸事業に参画しつつ、かつ東洋文庫の所蔵資料を活用して研究を行うことを支援する。2019年度には新たに「嘱託研究員規約」を施行し、嘱託研究員は所属長の許可を得た上で、本来の業務に影響を生じない範囲内で、個人または文庫の研究班・研究グループの調査研究活動等、研究者としてのキャリアアップのために必要な諸活動を行うことができ、かつ文庫から科研費に申請する資格を与え（ただし文庫等での勤務時間外に

みずから主体的な研究を行うだけの十分なエフォートを確保できる場合に限る)、嘱託研究員の任期満了後も東洋文庫の専任研究員として在籍し、文庫の諸施設を利用可能とすること等を定めた。

〔研究実施概要〕

若手研究者の育成と雇用支援を、研究データベースの構築と並ぶ最重要課題に位置づけ、以下の計画を重点的に展開した。

総合アジア圏域研究では、若手研究者育成の一環として、精密顕微鏡による紙質調査において、奨励研究員の多々良圭介氏の協力を得た。

現代中国研究では、2022年3月11日に若手研究者の報告会を開催し、衛藤安奈（東洋文庫奨励研究員）、神田豊隆（政治・外交グループ）が報告した。このほか、年間を通じて上記の各種プロジェクトに若手研究者を積極的に参加してもらい、個人の研究を奨励した。その結果、若手研究者2名（奨励研究員と臨時職員）が2022年4月に大学の専任職（准教授）と日本学術振興会特別研究員（PD）に採用された。

現代イスラーム研究では、中東・中央アジアの歴史的法令の翻訳作業に6名の若手研究者が研究協力者として参加し、なおかつ中心的な役割を果たした。

東アジア研究のうち**前近代中国研究班**「中国古代地域史研究」グループの研究会では、若手研究者が参加者の過半を占める。講読や報告は若手研究者が主体となっており、研究員がそれを批判し、誤りを修正し、足りない点を助言することで、若手研究者の研究遂行能力・執筆能力の向上を図った（【東ア-1】）。現地資料調査（2019年度の韓国現地資料調査に同行）およびデータベース作成において研究協力者として参加してきた専修大学大学院博士課程在籍の韓国人留学生李東奎氏が、2021年度に博士学位論文（題名「築造方法から見た横穴式古墳の研究」）を専修大学に提出し、博士（歴史学）の学位を取得した（【東ア-2】）。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループでは、正確な和文への翻訳および詳しい註釈を語彙・術語に施す「訳注」作成作業に注力している。東洋文庫では1924年の創設以来『歴代正史食貨志訳註』の事業を継続させ、10種の「正史食貨志」本文の訓読と註釈を蓄積し、東洋文庫刊行物の核心をなす「論叢シリーズ」として2009年までに『宋史食貨志訳註』（一）～（六）・索引計7冊（総頁数3,997頁）を公刊してきた。この永年培ってきた実績・経験、なかんずく訳註のスキルは、扱う時代・主題は異なっても、新進気鋭の若手研究者にとって、資料の操作、読解の力量を増進するために有益である。「訳註」作成を主とする月例研究会では、老練な専門研究者と、MC・DC・PD・現職の大学教員からなる若手研究者とが相半ばし、研究成果の報告に基づく、一種の「上級セミナー」の形をとっている。若手研究者の担当した報告は、下記の通り。

白山友里恵（上智大学大学院修士課程修了）が第93回研究会（2021年7月30日）より『新刻天下四民便覧三台萬用正宗』巻27「護幼門」下層の訳注を開始し、現在まで5回の報告を行っている。白山の修士論文『「諸病源候論」における虫表象傷寒類』では、隋代に編纂された、魏晋南北朝期医学の集積ともいえる医学書『諸病源候論』を主要史料とした。また中国・日本の医学書読解のスキルを有するため、中国前近代の小児医療・医薬を内容とする「護幼門」訳注を担当することとなった。明代の〈日用類書〉は、テキストの判読が難しく、引用も多岐にわたり、異体字・俗字が多用される。毎回の報告ごとに老練な専門研究者の指摘を受け議論し、大学院 DC レベルの力量となっている（【東ア-3】）。

若手研究者の養成やインターカレッジ的な学生指導のため、中国法制史関係の手引書や入門書を定期的に刊行し、これによって学界全体の水準引き上げに貢献することを目指し、『ゼミナール中国の法と社会』（仮題）の刊行の準備を進めた（【東ア-4】）。

近代中国研究班では、若手研究者2名を班員に迎えた。また昨年度に引き続き、若手研究者が中心となって、日中関係に関わる60年前のインタビュー記録を活字化して『近代中国研究彙報』第44号に掲載した（矢野真太郎「荒木貞夫の口述記録—満洲事変に

ついて(続)」(【東ア-5】)。

東北アジア研究班では、東洋文庫奨励研究員の多々良圭介氏が東洋文庫所蔵の「鑲紅旗檔」の紙質分析を実施した(【東ア-7】)。若手研究者の育成を目的に、満洲語研究講座を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止を余儀なくされた(【東ア-8】)。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班の突厥碑文研究会では、若手研究者(博士後期課程)3名をメンバーに加えて、ドイツ、トルコ、日本を結ぶオンライン形式で研究会を開催した(【内陸-1】)。近現代中央ユーラシア定期刊行物研究会は、若手研究者が中心の研究会であり、研究会メンバーのうち1名が2021年4月から東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門の准教授に、もう1名が2022年4月に北海道教育大学の准教授に着任した(【内陸-2】)。「土肥義和敦煌吐魯番文書調査資料(通称「土肥ノート」)」の整理とデータベース化プロジェクトでは、若手・中堅研究者の協力を仰ぎ、研究実績になるように支援している。「内陸アジア古文献研究会」では、若手・中堅研究者による研究報告とその後の議論に力を入れている。地道な試みであるが、今後も報告の機会を増やしていく(【内陸-3】)。チベット研究班では、資料研究に若手研究者を参加させ、指導しながら共同研究を行っている。河口慧海将来チベット写本大蔵経の研究データベースの作成において、画像データの調査に若手研究者の協力を得た(【内陸-4】)。

インド・東南アジア研究のうちインド研究班では、様々な共同研究・学会発表等を通じて若手研究者や海外を含む多くの研究者と交流し、新しい研究動向の把握に努めた(【南ア】)。東南アジア研究班では、若手研究者の研究会への参加を積極的に促すとともに、研究テーマについて6月の研究会で報告してもらおう機会を設けた(【東南】)。

資料研究では、名古屋大学の博士(文学)号取得者で、明代小説の挿絵画像の専門家である中塚亮氏を画像資料担当として採用し、研究の機会を提供した。

2021年度は、若手研究者育成の一環として下記の者を採用した。

〈嘱託研究員〉

・中村 威也

研究課題「中国古代地域社会、非漢族研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事し、かつその豊富な学術刊行物編集経験を東洋文庫の内外に対して普及させることに努めた。

・太田 啓子

研究課題「アラビア半島・紅海文化圏の歴史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため海外交流・国際シンポジウム事業に従事した。

・片倉 鎮郎 [新規]

研究課題「西インド洋近代史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

・清水 信子 [新規]

研究課題「和漢書誌学、日本漢学史、日本医学史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和漢古典籍及びコルディエ文庫等の調査・研究に従事した。

〈奨励研究員〉

・中塚 亮

研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。2022年度に科学研究費基盤研究(C)「図像資料から見る『封神演義』の受容と展開」の採択が決定した。

- ・多々良圭介
研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。2022年度に科学研究費基盤研究(C)「19世紀末－20世紀初中国の感染症流行の構造解析－感染症流行年表の制作を中心に－」の採択が決定した。
- ・衛藤 安奈
研究課題「戦間期の国民党を中心とするファシズムが近代中国において有していた政治史的意味の再検討」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。
- ・魏 郁欣
研究課題「明清時代における風水師とその活動についての社会史的研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。
- ・速水 大
研究課題「『敦煌氏族人名集成』の補完」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。
- ・蓮沼 直應 [新規]
研究課題「日本近代を通じた「禅」概念の変遷に関する研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。

なお、これまでの若手研究者育成の実績として、大学等研究機関の研究職に採用された方について挙げておく。

- ・清水 信子
2008年よりデータベース公開担当の臨時職員として、2021年9月より資料整理(受入)担当の嘱託研究員として勤務し、和漢書の画像データベース構築業務等に携わった。2022年2月に東洋文庫図書部正職員(受入係、和漢書整理担当)に就任。
- ・水口 友紀
2014年より資料保存整理担当の臨時職員として勤務し、和漢書をはじめとする蔵書の保存修復業務に携わった。2022年4月に東洋文庫図書部正職員(保存修復担当)に就任。
- ・衛藤 安奈
2021年5月に奨励研究員に任命、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。2022年4月に東海大学国際学部特任准教授に就任。
- ・河原 弥生
2016年4月から2017年3月にかけて、欧文編集担当の臨時職員として勤務し、欧文刊行物の編集・校閲業務に携わった。その後、内陸アジア研究班の近現代中央ユーラシア定期刊行物研究会に中心メンバーの一人として参加した。2021年4月に東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門の准教授に就任。

アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ

部門	研究班	アジア基礎資料研究テーマ	略号	
超域アジア研究	総合アジア圏域	アジア資料学におけるDigital Humanitiesの探求と活用—研究・蔵書・保存修復・展示のための連携データベースの構築	—	
	現代中国	現代中国の総合的研究（5）	—	
	現代イスラーム	中東・中央アジアにおける法制度の動態研究	—	
歴史文化研究	東アジア	前近代中国	中国古代地域史研究	東ア-1
			東アジアの古代・中世遺跡における遺構・遺物の考古学的研究	東ア-2
			中国社会経済・基層社会用語のデータベース化	東ア-3
			宋以後の法令分析を通じた中国前近代社会の構造解明	東ア-4
	近代中国	20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する総合的研究	東ア-5	
	東北アジア	近世朝鮮の各種文字・図像資料についての基礎的・総合的研究	東ア-6	
			東洋文庫所蔵清代満洲語文献及び画像資料等のデータベース化に関する研究	東ア-7
			清代中国諸地域の構造分析：政治・社会経済・民族文化の史的展開	東ア-8
	日本	岩崎文庫貴重書の書誌的研究（5）	東ア-9	
	内陸アジア	中央アジア	非漢字諸語出土古文文献の研究	内陸-1
			中央ユーラシア近現代史資料の収集・研究と共有	内陸-2
			日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究およびその国際発信	内陸-3
		チベット	チベット語資料研究データベースの構築とチベットの思想・文化の総合的研究	内陸-4
インド・東南アジア	インド	インド古代～近世における文書資料の研究	南ア	
東南アジア	近世後期の東南アジアをめぐる旅行記史料の研究	東南		
西アジア	西アジア	文書資料のデータベース化にもとづく比較制度研究	西ア	
資料研究	東アジア資料	東アジア現地資料の研究	—	



II. 資料収集・整理

図書部では、アジア基礎資料研究に取り組む各研究班と協力して、アジアの現状および歴史・文化に関する一次資料（写本、文書史料、刊本、地図、統計、調査記録等）、専門研究書、定期刊行物を収集し、東洋文庫所蔵資料の充実に努めた。

収集した資料を速やかに整理して電子情報化することで、アジア学資料センターとしての機能強化を推進した。東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化をさらに推進し、オンライン検索サービスにより広く一般の利用に供するため、様々な言語に通じた司書・研究者・大学院生による書誌データの加工作業を継続した。

2015-2020年度に続き、東洋文庫の所蔵資料のうち、和書・漢籍・洋書古典・近代初期洋書、絵画、考古資料等に対する悉皆調査を行い、専門家による和漢洋古典籍の保存修復を実施するとともに、書誌学・資料学の専門家の協力のもと調査・分析ならびに記録を行い、デジタル・アーカイヴに加工し、広範な利用目的に対応すべく継続的作業を行った。

以上の活動を推進するため、書誌学に通暁した人材の育成と、アジア資料学の構築を目指し、東洋文庫独自の若手人材育成という課題に取り組んだ。

A. 資料購入

図書部では、超域アジア研究、アジア諸地域研究（「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」（p.32を参照））において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は下記の通りである。

区 分	予算額	決算額	和漢書	洋書	その他	計
総合アジア圏域研究	150,000	3,410,050	25	8	0	33
超域・現代中国研究	1,850,000	605,612	62	0	0	62
超域・現代イスラーム研究	1,850,000	1,757,567	0	354 (104)	0	354 (104)
東アジア研究	2,960,000	2,811,023	144	1	0	145
内陸アジア研究	750,000	1,476,030	28	61	0	89
インド・東南アジア研究	750,000	568,093	0	19	0	19
西アジア研究	750,000	644,894	0	161	0	161
共通(継続・大型資料)	8,700,000	18,377,883	1,292 (939)	170 (138)	7	1,469 (1,077)
合 計	17,760,000	29,651,152	1,551 (939)	774 (242)	7	2,332 (1,181)

※単位: 予算額・決算額＝円

和漢書・洋書・その他・計＝冊(その他はマイクロフィルム1リール、CD1枚を1冊に換算)

※()は、上記の冊数のうち雑誌の冊数。なお、洋雑誌のうち現代イスラーム研究104冊はアジア諸語、共通138冊は欧文雑誌。

主な購入図書

青本 千本さくら

本朝書籍目録（正徳二年賀茂義頭写本）

詩経啗鳳詳解

近代史所蔵清代名人稿本抄本 第2輯

海關總署檔案館蔵未刊中國舊海關出版物（1860－1949）

LANDING OF COMMODORE PERRY, OFFICERS & MEN OF THE SQUADRON,

TO MEET THE IMPERIAL COMMISSIONERS AT YOKU-HAMA, JAPAN MARCH 8TH 1854. To Commodore M. C. Perry, Officers of men of the Japan Expedition… (ハイネ/ブラウン「1854年3月8日、ペリー提督と艦隊士官が(日本)帝国委員との面会のために横浜に上陸する図(ペリーの横浜上陸図)」)

LANDING OF COMMODORE PERRY, OFFICERS & MEN OF THE SQUADRON, TO MEET THE IMPERIAL COMMISSIONERS AT SIMODA, JAPAN. JUNE 8. 1854. To Commodore M. C. Perry, Officers of men of the Japan Expedition… (ハイネ/ブラウン「1854年6月8日、ペリー提督と艦隊士官が(日本)帝国委員との面会のために下田に上陸する図(ペリーの下田上陸図)」)

Wahrhaftige Beschreibungen zweyer mächtigen Königreiche JAPPAN und SIAM … Alles aus dem Niederländischen übersetzt und mit Kupferblättern geiert, Denen noch beygefüget Johann Jacob Merckleins Ost=Indianische Reise… (カロン著/スハウテン著/メルクライン(訳注・著)/アーノルド(編)『日本大王国志』「シャム王国志」「ゼーランディア城陥落記」「メルクラインの東洋遍歴記」ほか収録)

Premier Voyage Autour du Monde. Sur L'Escadre de Magellan. Pendant Les Annés 1519 (ピガフェッタ『マゼラン世界周航記』)

B. 資料交換

図書部では、国内外の各提携機関との間で資料交換を進めた。

区分	受 贈					寄 贈		
	和漢書	洋 書	アジア諸語	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	884 冊	248 冊	4 冊	47 件	1,136 冊 47 件	1,322 冊	0 冊	1,322 冊
定期刊行物	691 冊	106 冊	22 冊	9 件	819 冊 9 件	4,372 冊	587 冊	4,959 冊
計	1,575 冊	354 冊	26 冊	56 件	1,955 冊 56 件	5,694 冊	587 冊	6,281 冊

C. 図書・資料データ入力

図書部では、新収資料の書誌入力および所蔵資料の書誌データ整備作業を継続した。

東洋文庫では、2020年度にフランスの東洋学者アンリ・コルディエ(Henri Cordier 1849-1925)の旧蔵書「コルディエ文庫」が永青文庫より寄託された。これを受け、2021年度に東洋文庫研究員を中心に結成されたコルディエ文庫研究会と協力して、東洋文庫所蔵本との重複調査を開始した(1,937件中、1,149件完了)。今後、書誌データと現物の照合等を行い、2022年度に閲覧室での一般公開を目指す。また、東洋文庫創立100年(2024)～コルディエ没後100年(2025)を目途に文献解題の完成を目指す。



コルディエの蔵書であることを示す「高」の文字を箔押しした背表紙。



アンリ・コルディエ(Henri Cordier, 1849-1925)。75歳の時に自身で作成したビブリオグラフィ、*Bibliographie des oeuvres de Henri Cordier*(パリ, 1924)の写真より。

D. 資料保存整理

図書部が2021年4月1日～2022年3月31日の期間に実施した保存整理作業は、下記の通りである。

保存整理作業として、保存環境の整備、虫菌害の対策に努めるとともに、破損資料の修理・修復、洋書革装本の保全処置、保存容器の作製などを行った。本年度は、昨年度に引き続き、ミュージアムでの展示資料を初めとする和・漢・洋古典籍（モリソン文庫・岩崎文庫ほか）を中心に作業を行った。

その他、2020年度に受託した貴重洋書群コルディエ文庫約5,500冊のクリーニング作業を引き続き行った。

また、2022年4月下旬より2024年にかけて全国5箇所で開催予定の特別展「知の大冒険—東洋文庫 名品の煌めき—」における出陳資料の状態点検・調査、並びにそれに伴う補修、展示治具の製作・確認などの作業を行った。

以上に関しては、若手人材育成プロジェクトの一環として、保存修復の専門家による指導のもと実践的な保存整理作業を行った。

保存修復措置	点数・冊数
修理・修復（破損による再製本を含む）	洋書 50点 和漢書 299点
革装本の保全処置（HPC塗布など）	23点
保存容器（外注含む）	202点
状態点検・調査のみ（処置なし）	170点
カビ等のクリーニング処置	78点
寄託資料：永青文庫所蔵コルディエ文庫クリーニング作業	76冊

Ⅲ. 資料研究成果発信

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) 第103巻第1-4号 A5判 4冊(刊行済) ▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1362
2. 『東洋文庫欧文紀要』 No.79 B5判 1冊(刊行済) (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko) ▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1373
3. 『近代中国研究彙報』 第44号 A5判 1冊(刊行済) ▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1374
4. 『東洋文庫書報』 第53号 A5判 1冊(刊行済) ▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1375
5. <i>Modern Asian Studies Review</i> Vol.13 オンラインジャーナル(公開) ／新たなアジア研究に向けて ▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1371
6. <i>Asian Research Trends New Series</i> No.16 A5判 1冊(刊行済) ▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1376

B. 論叢等出版

1. 『集体化时代的中国: 日中共同研究』(東洋文庫和文論叢84) A5判 1冊(刊行済) ▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1369
2. 『清朝の史跡をめぐってⅡ—アムール流域篇—』 A4判 1冊(刊行済) ▶ http://id.nii.ac.jp/1629/00007577/
3. 『岩崎文庫貴重書書誌解題X』 B5判 1冊(刊行済) ▶ http://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1378
4. 『清朝『壇廟祭祀節次』訳注(一)—「凡諸祭祀」「祈穀壇」—』 B5判 1冊(刊行済) ▶ http://doi.org/10.24739/00007607

※▶は、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」の掲載アドレス(一部は公開準備中)。

IV. 普及活動

研究部では、アジア基礎資料研究の成果を一般に普及するため、研究員等による東洋学講座を全5回オンライン形式で実施した。また、著名な外国人研究者による特別講演会を開催した。従来の対面での講演会・シンポジウム等の開催に加えて、オンライン形式での開催を実施することで、遠方や海外在住者の参加が容易となり、より広範囲に研究成果を発信・普及することが可能となった。

普及展示部では、学芸員を雇用して、東洋文庫の蔵書資料や研究成果をわかりやすく展示解説し、一般に広く普及するための活動に取り組んだ。

研究部・図書部では、書誌情報・研究情報を普及するため、毎月DB小委員会を開催して、協同してOPACシステム・東洋文庫リポジトリERNESTの管理・運営を行った。

東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化は、総冊数約100万冊の基本的な書誌データ部分の遡及入力を完了した。2021年度より、引き続きアジア諸語資料の文字化けの修正作業、新規購入・受贈資料の入力作業、および叢書に含まれるタイトルに対して個々の分類を付す作業を継続的に実施した。書誌データベースの改修計画として、検索機能の強化のため、曖昧検索機能の実装について、検討を進めた。貴重洋書の全頁資料、絵画、地図等のデジタル化を進めると同時に、梅原考古資料の未公開部分のデジタル化・データベース化を推進し、OPACシステムのクラウド移行を実施するなど、各学術分野を包括した学際的なニーズに応える電子図書館の構築に取り組んだ。

各部協同して、フランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン研究所、ロンドン大学SOAS図書館等協力協定機関およびその他の海外機関との学術交流や研究情報の国際発信を促進した。

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

研究部では、近年の研究成果を一般に向けて広く普及するため、2021年9月-11月に東南アジア研究班、2022年1月-2月に日本研究班による講座をオンラインにて実施した。

東南アジア研究班 統一テーマ：「近世東南アジアの対外交流」

第1回（通算第578回）

日時：2021年9月8日（水） 18時-20時

講演者：北川 香子氏（東洋文庫研究員・学習院女子大学教授）

題目：「17世紀クメール語書簡の分析」

第2回（通算第579回）

日時：2021年10月14日（木） 18時-20時

講演者：弘末 雅士氏（東洋文庫研究員・立教大学名誉教授）

題目：「近世東南アジアの社会統合と現地人女性」

第3回（通算第580回）

日時：2021年11月11日（木） 18時-20時

講演者：嶋尾 稔氏（東洋文庫研究員・慶應義塾大学教授）

題目：「ベトナム科举制度雑考」

日本研究班 統一テーマ「東洋文庫蔵・日本古典の絵入り本」

第1回（通算第581回）

日時：2022年1月13日（木） 18時-20時

講演者：齋藤 真麻理氏（東洋文庫研究員・国文学研究資料館教授）

題目：「奈良絵本の楽しみ——浦島・天神・万寿姫——」

第2回（通算第582回）

日時：2022年2月3日（木） 18時-20時

講演者：大谷 節子氏（成城大学教授）

題目：「絵で読む能——東洋文庫蔵「観世流絵入謡本」熟覧——」

2. 東洋文庫公開講座・公開研究会

研究部では、東洋文庫の所蔵資料や研究活動・研究成果をテーマとして、国内外の当該分野の著名研究者を招いて実施した（以下、開催日順で記載）。

4月17日（土）東洋文庫現代中国研究班「国際関係・文化グループ」2021年度第1回研究会

東洋文庫現代中国研究班・国立国会図書館関西館合同企画「新たな現代中国研究の推進—国立国会図書館関西館及び東洋文庫の所蔵資料をめぐって—」

※東洋文庫研究員3名、国立国会図書館関西館アジア情報課職員2名、若手研究者1名による報告

5月29日（土）東洋文庫現代中国研究班「国際関係・文化グループ」2021年度第2回研究会

「近現代中国・台湾をめぐる政治思想史研究の現在」

※孫宏雲氏（中山大學）、薛化元氏（政治大學）、小野泰教氏（学習院大學）による報告、およびそれに対するコメント

9月10日（金）東洋文庫現代中国研究班「国際関係・文化グループ」2021年度第3回研究会

「冷戦下における日本と中華圏の人物交流史」

※東洋文庫研究員2名、若手研究者3名および林果顯氏（政治大學）・陳学然氏（香港城市大學）による報告、黄克武氏（中央研究院近代史研究所）による総合コメント

11月28日（日）東洋文庫近代中国研究班シンポジウム

「東洋文庫刊『戦前日本の華中・華南調査』をめぐって」

※『戦前日本の華中・華南調査』（2021年3月刊）に対する塩出浩和氏（城西国際大学）・平井健介氏（甲南大学）によるコメントと、執筆者14名（東洋文庫研究員）からの応答

12月4日（土）東洋文庫現代中国研究班「国際関係・文化グループ」・華東師範大学社会主義歴史と文献研究院中国当代史研究中心主催、東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点等共催

「第10回「中国当代史研究」ワークショップ」

※日本側5名、中国側5名の報告とそれに対するコメント、および楊奎松氏（華東師範大学）・石川禎浩氏（京都大学）による総括コメント

12月18日（土）東洋文庫現代中国研究班・一般社団法人中国研究所共催
「最新研究でみる辛亥革命への多角的視座—辛亥革命110年シンポジウム」
※若手研究者5名による報告と、それに対するコメント

12月18日（土）東洋文庫現代中国研究班「政治・外交グループ」・早稲田大学現代
研究所共催研究会
「中国対外政策の形成過程」
※牛軍氏（北京大学国際関係学院教授）による講演

2022年3月11日（金）東洋文庫現代中国研究班「国際関係・文化グループ」研究会
※衛藤安奈氏（慶應義塾大学）と神田豊隆氏（新潟大学）による報告と、それに対する
コメント、青山瑠妙氏（早稲田大学）と村田雄二郎氏（同志社大学）による総括コ
メント

3. 特別講演会

研究部では、東洋文庫研究員、研究班の主催によって、主として来日中の著名な外国
人研究者を招いて実施した。

2022年1月12日（水）

「日本仁丹和味之素在中国市場的競争と本地化（1920-30年代）」
※李培徳教授（香港大学名誉教授、立命館大学客員教授）による講演会（中国語普通
話による講演、日本語による質疑応答）。

4. 東洋文庫談話会（東洋文庫研究会）

研究部では、専門分野の若手研究者による成果報告会として、その対象を東洋文庫
外部の若手研究者にまで拡大した研究発表会の創設について検討した。

5. ミュージアムによる公開講座・イベント

普及展示部では、平時は、東洋学の一般への普及を目的に、企画展に合わせた公開講
座・イベントを実施しているが、新型コロナウイルス感染症対策のため今年度は開催を見合
わせた。

6. 研究情報の普及

研究部・図書部では、書誌情報・研究情報を普及するため、毎月DB小委員会を開催
して、協同してToyo Bunko OPACシステム (<https://opac.tbopac.com/>。利用統計は次
頁のとおり)、機関リポジトリ「ERNEST」 (<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>。利用統
計は「I アジア基礎資料研究」p.19に既出) の管理・運営を行った。

2021 度 Toyo Bunko OPAC 利用統計

年 月	訪問者数	1 日平均	検査数	1 日平均
2022 年 1 月	15	1	24	1
2 月	27	1	61	2
3 月	123	4	239	8
合 計	165	2	324	4

※30分以内に同一IPから訪問があった場合は1名としてカウントされる。

※2021年4月-8月は原因不明の異常値が記録されたため、9月-12月はクラウド移行の準備でOPACを停止していたため、2022年1月のクラウド移行後の数値のみ挙げる。

7. 参考情報提供

調査研究による研究成果をはじめ東洋文庫の活動全般に関する年次報告書として、下記の刊行を行った。

『東洋文庫年報』2020年度版

A5判 1冊 (刊行済)

https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1377

※『東洋文庫年報』は、2021年度版から紙媒体での出版を止め、オンライン版に完全移行することを決定した。

B. データベース公開

図書部が中心となり、アジア基礎資料研究に取り組む研究班・研究グループと協力して、洋装本漢籍等の書誌データの補充のほか、貴重洋書の全頁資料、絵画、地図等の画像データのデジタル化を進めると同時に、梅原考古資料の未公開部分のデジタル化公開に取り組んだ。著作権上の問題等により一般公開に至っていないデータについて登録制を導入することで、サンプルデータをウェブサイト上で視聴できるようにし、データの全篇については東洋文庫閲覧室の専用端末で視聴できる体制を継続した。

研究部・図書部が協同して、2021年1月にOPACシステムをオンプレミス形式からクラウド形式に移行し、2022年度以降、現行の書誌データベースをOPACに移行する体制整備を進めた。東洋文庫では、2020年4月に国立公文書館アジア歴史資料センターとの間でシステム連携に関する協定を締結しており、2022年3月15日に文庫側の準備作業を完了した(センター側の公開手続き中)。これによって、東洋文庫がOPAC上で公開する近代中国関係日本語資料の書誌情報・画像データを、センターの運用する情報提供システムでも横断検索できるようになる。なお、今回画像公開した資料は、東洋文庫が管理を引き継いだ旧・現代中国研究資料室のウェブサイトにおいても一覧を公開している (<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib1/>)。



OPAC 公開中の近代中国関係日本語資料の IIIF 画像データ

書誌データベースのうち和書と洋書はすでに分類検索機能を実装して公開しているが、漢籍は未着手であった。この欠を補うため、図書部では、東アジア資料研究班と協力して、漢籍の分類検索システムの構築と公開に向けた計画の策定を開始した。

C. 海外交流

各部協同して、フランス極東学院および台湾中央研究院（歴史語言研究所・近代史研究所）、ハーバード・エンチン研究所、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、ロンドン大学SOAS図書館、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所、国際テュルク・アカデミー、吉林師範大学満学研究院との学术交流を進め、資料情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施した。2021年度は、新たにオックスフォード大学St.Anne Collegeと学术交流協定を締結した。

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材の育成に共同で取り組んだ。

世界各地のアジア基礎資料研究に取り組む外国人研究者と協力して、対面、あるいはオンライン形式によって、国際シンポジウム・ワークショップ・研究会等を通じた国際学术交流を推進した。



ハーバード・エンチン研究所

V. 学術情報提供

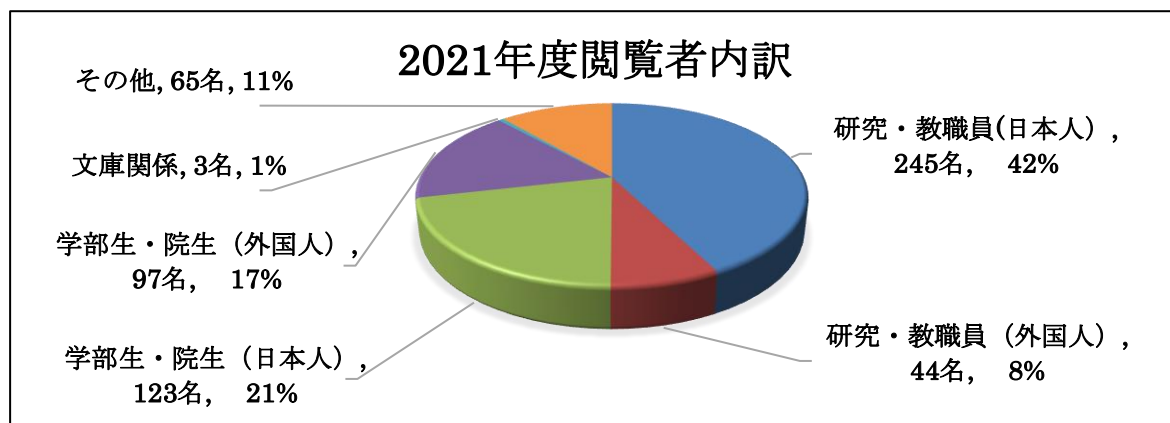
東洋文庫は、日本における東洋学にかかわる共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

図書部では、広く一般に開放された無料の閲覧室の運営を行った。

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
書庫利用者人数	23人	20人	34人	43人	46人	29人
閲覧者人数	39人	31人	52人	58人	56人	53人
閲覧図書数	2,880冊	2,089冊	2,330冊	3,034冊	2,080冊	2,571冊
レファレンス数	56件	53件	51件	54件	50件	62件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
43人	29人	26人	16人	25人	38人	372人
58人	57人	51人	46人	39人	37人	577人
2,292冊	2,124冊	9,904冊	1,423冊	2,807冊	4,020冊	37,554冊
45件	55件	210件	36件	60件	68件	800件



B. 研究資料複写サービス

(1) マイクロ・フィルム

申込件数	紙焼用撮影駒数	紙焼提供枚数	フィルム提供齣数
104	329	424	85

(2) 電子複写

申込件数	提供枚数
464	16,469

C. 情報提供サービス

研究部では、刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

普及展示部では、広く一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期している。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展(名品展)と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

- a) 2021年度は同年1月末から開幕した「大清帝国展 完全版」を含む以下の展覧会を開催し、各企画展において図録を発行した。緊急事態宣言の発令にともない、コロナウイルス感染拡大防止のため、4月26日～6月1日まで臨時休館の措置をとった。これにより、当初予定していた会期が一部変更となった。また、三菱創業150周年記念事業として、三菱一号館美術館、静嘉堂、東洋文庫の共催で『三菱の至宝展』を開催し、丸の内の三菱一号館美術館にて東洋文庫の所蔵品を40点ほど厳選し、展示した(2021年6月30日～9月12日)。

〈企画展〉

- ①『大清帝国展 完全版』(会期:2021年1月27日～5月16日)

※緊急事態宣言の発令により、4月26日より閉幕まで休館

- ②『江戸から東京へー地図にみる都市の歴史』(会期:2021年5月26日～9月26日)

※臨時休館により、6月2日から開幕

- ③『ミュージアム開館10周年記念 東洋文庫名品展「東洋学」の世界へようこそ』
(会期:2021年10月6日～2022年1月16日)

- ④『シルクロードの旅』(会期:2022年1月26日～5月15日)

〈名品展〉

「記録された記憶～東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史」

- b) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものわかりやすいものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。

5. 文京区向けの普及活動

- a) 加盟している「文の京ミュージアムネットワーク(文京区主催)」による文京ミュージアムフェスタ(各施設による展示、PRポスター、パネル等の掲示)に参加した。今回はコロ

ナ禍となりチラシの配架のみとなった(12月22日、於文京区役所1F)。

6. 入場者数

2021年4月1日～2022年3月31日における、ミュージアム総入場者数は、以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
入場者数	2,110	0	1,662	2,803	2,162	4,051	2,282	3,889	4,386

1月	2月	3月	計
3,112	2,254	3,458	32,169

※4月26日～6月1日は新型コロナウイルス感染拡大の影響により休館。

E. 普及広報

普及展示部では、東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。また、若手研究者の育成等を目的に、各部協同して、研究奨励金制度の運営、成蹊大学との連携授業、および東洋文庫アカデミアの運営を行った。

1. 報道実績

ミュージアムに関する報道実績の主なものを以下に挙げる(50音順)。

新聞：『朝日新聞』、『紙之新聞』、『中外日報』、『日経新聞』、『読売新聞』など。

テレビ：ニコニコ動画『ニコニコ美術館』、BS日テレ『ぶらぶら美術博物館』、NHK BSプレミアム『紫禁城 中国“最強”皇帝の秘めたる園』など。

ラジオ：TBSラジオ『安住紳一郎の日曜天国』など。

2. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

3. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信した。

4. 小学生・中学生・高校生・大学生向けの学習支援・普及活動

a) 東京藝術大学との協力協定により、同学彫刻科の卒業作品から一作品を選出して「東洋文庫賞」を授与し、東洋文庫敷地内のオープンスペースにて作品を展示した。

b) 昭和女子大学の「東洋文庫 Student Internship Program」により、9月20日～9月28日の期間で、同大学の学生4名をインターンとして受け入れた。

c) キャンパスパートナーシップを結んでいる昭和女子大学の学生3名を8月26日～9月3日、東洋大学の学生2名を12月1日～12月9日、青山学院大学の学生3名を12月14日～12月22日の期間で、それぞれ学芸員実習生として受け入れた。

d) 筑波大学附属視覚特別支援学校の中学3年生2名に「図書部の仕事」の職場体験を実施(12月3日)。

e) 2021年度よりスクールパートナーシップを締結した広尾学園小石川中学校・高等学校の学生が事前に収録した展示解説ビデオで学習後、12月8日中学生40名、12月17日高校生11名、1月11日(休館日)中学生80名、ミュージアムを見学

した。

5. 「斯波研究奨励金」の給付

2018年度に斯波義信文庫長のご寄付によって設立した特定資産「斯波研究奨励基金」と「斯波研究奨励金制度」により、2021年度、東洋文庫奨励研究員を対象に募集・選考を行い、4名（新規2名、延長2名）に対して研究奨励金年額各50万円を給付した。

6. 「榎原研究奨励基金」の創設

2022年2月、第12代理事長榎原稔氏（1930～2020）のご遺族からの寄付金を基金化して特定資産「榎原研究奨励基金」を設立した。これを発足原資として、ハーバード・エンチン研究所（以下「HYI」と称す）をはじめ、東洋文庫と学术交流協定を締結する海外研究機関が取り組む「ビジュアル資料の保存・デジタル化・展示・公開・研究活用と、若手研究者の育成、および国際交流事業の推進」を目的に、給付型奨励金「榎原研究奨励金制度」を導入した。

7. 成蹊大学との連携授業

成蹊大学との連携講座として、2021年度後期に文学部総合講義を担当した（オンライン開催）。ミュージアムの展示やデータベース・出版物を通じた研究成果の発信など東洋文庫の諸活動の意義について理解を深め、アジアの歴史・文化への関心を高める機会となった。2022年度も引き続き東洋文庫の諸活動を紹介する講座を担当する予定。

8. 東洋文庫アカデミア

東洋に関する歴史、文学、美術、音楽、宗教、政治、経済、文化、社会、語学、図書館学、博物学等の広い分野を対象として、東洋文庫の持つ、図書・研究・普及の活動を総合し、一般向けの生涯学習講座「東洋文庫アカデミア」を実施し、ベテラン研究員による研究成果の普及とともに、若手研究者が講師経験を積む場として活用した。

コロナ禍をひとつの契機として、「オンライン講座」を実施し、遠隔地在住の講師・受講者の参加を推進した。下記の講座を全てオンラインにて開講した。

講座名	講師（所属）	期間	回数	人数
「盛世滋生図」から読み解く清代都市の暮らしと経済	相原佳之（東洋文庫研究員）	2021年4月28日～5月12日	2	6
大清帝国の終焉と“中国のモリソン”	濱下武志（東洋文庫研究員）	2021年5月1日～5月8日	2	15
大清帝国と感染症—天花とその傷痕—	多々良圭介（東洋文庫奨励研究員）	2021年8月18日～8月25日	2	10
中国医学史散策：黄帝の〈治療世界〉	角屋明彦（明治大学法学部非常勤講師）	2021年9月4日～9月18日	3	39
モンゴル帝国から大清帝国へ	宮脇淳子（東洋文庫研究員）	2021年9月18日～12月4日	6	50
聖獣グリフィンの誕生と伝播	林俊雄（東洋文庫研究員）	2021年9月22日～10月27日	5	13
歴史から神仙と妖怪の物語へ：『封神演義』の成立と展開	中塚亮（東洋文庫奨励研究員）	2021年10月9日～10月23日	2	13

F. 国際交流

東洋文庫は、フランス国立極東学院および中央研究院の歴史言語研究所・近代史研究所（台湾）、ハーバード・エンチン研究所（アメリカ）、アレキサンドリア図書館（エジプト）、イラン議会図書館、SOAS（イギリス）、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所（ドイツ）

ツ)、国際テュルク・アカデミー(カザフスタン)、吉林師範大学満学研究院(中国)院と協力協定を締結しており、これらを中心に国際交流を推進した。2021年度は、新たにオックスフォード大学St.Anne Collegeと学術交流協定を締結した。

G. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1)外国人研究員の受入

フランソワ・ラショウ (フランス国立極東学院 東京支部長)

「近世日本の美術史・宗教史 (蒐集家と文人のネットワーク、黄檗文化等々)」

「近世期の東アジアの交流史 (日本・中国・ロシア・西欧)」

(2017年3月15日～2022年12月31日)

GAZANGJIE (青海民族大学 民族学与社会学学院 准教授、JSPS 外国人特別研究員)

「近代アジアの政治形勢における日本とチベットとの関係」

(2021年11月29日～2023年11月28日)

[受入研究員：吉水千鶴子]

侯 彦伯 (中山大学歴史学部専門研究員)

「The Trade and Navigation of Junks in the Lingnan Region, 1840-1911」

(2022年1月1日-2022年12月31日)

[受入研究員：濱下 武志]

陶 徳民 (関西大学名誉教授・関西大学東西学術研究所研究員)

「近世近代日本漢学思想史・近代東アジア文化交渉史」

(2021年9月1日～2022年8月31日)

[受入研究員：斯波 義信]

(2)外来研究者の受入

なし

(3)2021年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

三王 昌代(東京大学大学院)

「18-19世紀漢語・欧米諸語資料とスールー海域の現地語資料の比較」

(2021年度採用、3ヶ年度)

[受入研究員：岸本美緒]

(4)2021年度嘱託研究員の採用

・中村 威也[継続]

研究課題「中国古代地域社会、非漢族研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事し、かつその豊富な学術刊行物編集経験を東洋文庫の内外に対して普及させることに努めた。

・太田 啓子[新規]

研究課題「アラビア半島・紅海文化圏の歴史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため海外交流・国際シンポジウム事業に従事した。

- ・片倉 鎮郎[新規]
研究課題「西インド洋近代史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。
- ・瀧下 彩子[新規]
研究課題「近現代中国社会文化史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため近現代中国関係資料の整理、『東洋文庫書報』の編集等に従事した。
- ・清水 信子[新規]
研究課題「和漢書誌学、日本漢学史、日本医学史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和漢古典籍及びコルディエ文庫等の調査・研究に従事した。

(5) 2021 年度奨励研究員の任用

- ・中塚 亮[継続] ※2019～2021 年度斯波研究奨励金受給者
研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。2022 年度に科学研究費基盤研究（C）「図像資料から見る『封神演義』の受容と展開」の採択が決定した。
- ・多々良圭介[継続] ※2019～2021 年度斯波研究奨励金受給者
研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。2022 年度に科学研究費基盤研究（C）「19 世紀末－20 世紀初中国の感染症流行の構造解析－感染症流行年表の制作を中心に－」の採択が決定した。
- ・衛藤 安奈[新規]
研究課題「戦間期の国民党を中心とするファシズムが近代中国において有していた政治史的意味の再検討」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。
- ・魏 郁欣[新規] ※2021 年度斯波研究奨励金受給者
研究課題「明清時代における風水師とその活動についての社会史的研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。
- ・速水 大[新規] ※2021 年度斯波研究奨励金受給者
研究課題「『敦煌氏族人名集成』の補完」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。
- ・蓮沼 直應[新規]
研究課題「日本近代を通じた「禪」概念の変遷に関する研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業に参画した。

※奨励研究員の任期は、3 カ年度以内。3 カ年度の受入期間終了後は、1 カ年度ずつ、最大 3 回まで更新可。

※斯波研究奨励金の給付期間は 1 年間。選考委員会による延長審査に合格した場合は、1 年間ずつ、最大 3 年間まで給付期間が延長される。

2. 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により未実施に終わった。

以 上

2021年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人 東洋文庫
理事長 畔柳 信雄

2021年4月1日から2022年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業の概要は、下記の通りです。

事業内容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費(データベース、学術図書)の対象事業

①学術図書

『中国殷王朝考古学研究』

[応募者:飯島 武次]

2. 基盤研究(A)の対象事業

「漢文大蔵経の文献学的研究基盤の構築:『大正新脩大蔵経』底本・校本 DB の活用と拡充」

[研究代表者:會谷 佳光]
(2021年度採用、5ヶ年・初年度)

3. 基盤研究(B)の対象事業

「寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから」

[研究代表者:三浦 徹]
(2017年度採用、4ヶ年・最終年度)
2020年度分繰越(終了)

「公論と暴力ー革命の比較研究」

[研究代表者:三谷 博]
(2019年度採用、5ヶ年・第3年度)
2019年度分再繰越(終了)
2020年度分繰越

「現代新疆における少数民族の文化動態に関する研究:民族言語出版物からの検討」

[研究代表者:梅村 坦]
(2020年度採用、4ヶ年・第2年度)
2020年度分繰越(終了)

4. 基盤研究(C)の対象事業

『大正新脩大蔵経』編纂の実態に関する書誌学的研究:増上寺報恩蔵本を通して」

[研究代表者:會谷 佳光]
(2018年度採用、3ヶ年・最終年度)
※1ヶ年度期間延長

「三上次男考古・美術資料の研究とデータベースの作成」

[研究代表者:金沢 陽]
(2018年度採用、4ヶ年・第3年度)

「西洋における知識革命の物質的基盤の解明——16～18 世紀の西洋古典籍の紙分析から」

[研究代表者:徐 小潔]
(2019 年度採用、3ヶ年・第 2 年度)

「From Transculturation to Culture-Specific Ethics: The Implementation of Confucian Ritual Forms in 19th Century Japan」

[研究代表者:Chard Robert]
(2019 年度採用、3ヶ年・第 2 年度)

「出土史料よりみた、中国古代における死生観・冥界観とその思想的・宗教的背景の研究」

[研究代表者:関尾 史郎]
(2021 年度採用、3ヶ年・初年度)

5. 若手研究の対象事業

「日本近代を通じた「禅」概念の変遷に関する研究」

[研究代表者:蓮沼 直應]
(2021 年度採用、3ヶ年・初年度)

6. 特別研究員奨励費の対象事業

「8-19 世紀漢語・欧米諸語資料とスールー海域の現地語資料の比較」

[研究代表者:三王 昌代]
(2021 年度採用、3ヶ年・初年度)

7. 特別研究員奨励費(の対象事業

「近代アジアの政治形勢における日本とチベットとの関係」

[研究代表者:吉水千鶴子、研究分担者:GAZANGJIE]
(2021 年度採用、2ヶ年・初年度)

B. 三菱財団研究助成による事業

1. 人文科学研究助成

「モリソン・コレクションの学際的・総合的研究:近代東アジア史と「アジア文庫」形成の資料的分析」

[申請者:斯波 義信]
(2019 年 10 月採用、1ヶ年)
※コロナ禍により2年期間延長

「インド古代～中世初期におけるバラモンと王との関係の研究:灌頂を受ける資格としての王の出自について」

[申請者:吉水 清孝]
(2020 年 10 月採用、1ヶ年)
※コロナ禍により1年期間延長

2. 人文科学研究助成「社会的課題解決のための大型連携研究助成」
「20世紀後半の東アジアにおける風土病の制圧過程の検証と疫学的資料の整理・保存・公開」

[申請者：飯島 渉]
(2019年10月採用、3ヶ年)
※コロナ禍により1年期間延長

以上